

《 歴史&宗教 No010 》

～ (滝山地区) 近場の写し霊場 ～

(山形市上桜田の大 沼 ^{かおる} 香)

【 ま え が き 】

「吾が人生放物曲線」を辿って来た私ですが、還暦の頃になった途端に神仏、すなわち神社仏閣に関心が湧いて来ました。

今の私は、幼児期は7歳の頃の私とイコールなのですが、ただ、今の私が幼児期と違うのは、先々そうは長くない人生と言う認識がある事から、私は自然と神仏に引き寄せられて行くのを覚えます。私のいう神仏の力というのは、全てがお金の世の中にあっても、価値の物差しがお金ではない、何か偉大な理想像と言うものであって、識者や学者と雖も言葉や文字には表現出来ない何か偉大な存在のことを言います。私の言う神仏は、現代の宗派・宗教法人とはまったく異なり、何物にも変え難い普遍的な精神性・何か偉大なもの・無量無辺の大和魂と言うことでもあります。筆舌尽くし難い偉大・崇高なもの、「サムシング・グレート（何か偉大な存在）」です。

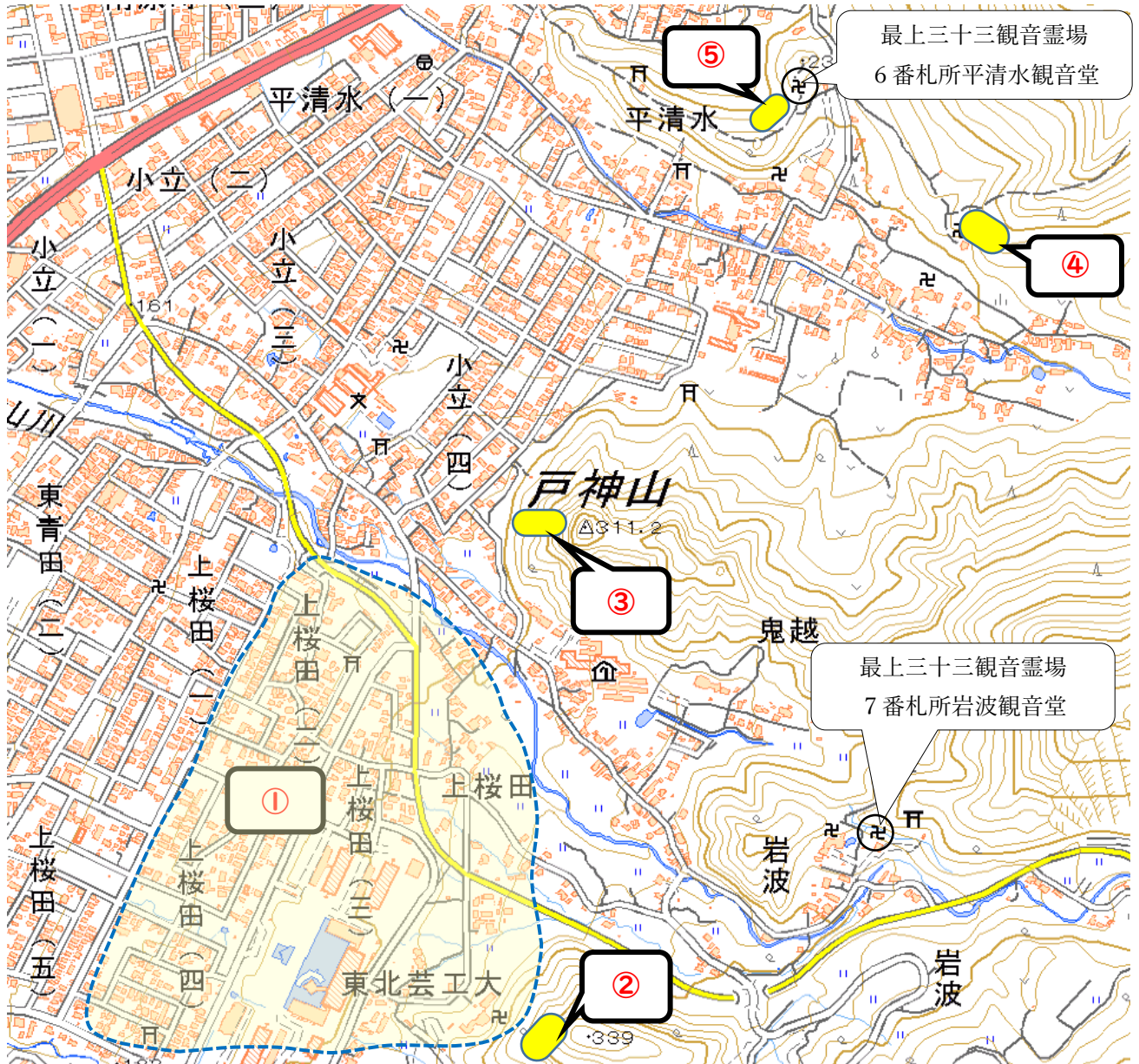
そんな中で目に留まったのが、後に記述して行く霊場と巡礼のことについてです。代表格は何と言っても弘法大師（南無大師遍照金剛）と同行二人の「四国八十八ヶ所霊場」です。このような歳になれば、四国には一度は行って見たいと思う憧れの霊場です。そこで、四国霊場の徒歩へんろ——一般的呼称の文字は遍路、私のものはへんろという——を3回、西国観音霊場の徒歩へんろを1回、順礼貫（完）歩して来ました。昔から一度は行きたいと思うのは伊勢神宮参りと信州善光寺参りと四国霊場と言われます。私は、伊勢神宮参りは4回、善行寺参りは2回行って来ました。

霊場巡りだけではなく、あちらの神社、こちらの寺院に出向いて御利益を授かりたく、二世（現在世・未来世）の安楽を求めたく、欲望は果てしないものがあります。これが人というものです。こんなことをつらつら思う時に吾が足元のことが気になり、吾が住まいなるこの地元の身近な歴史・神仏に係る社寺にも関心が強くなって来ました。

そこで、以下、本書で取上げるのは自宅近場の『写し霊場』と言われるものについてです。

《 はじめに 》

私の身近な場所にある『写し霊場』について、現時点で私が確認している次の5箇所（図M-1）の概要を整理して見ました。



図M-1

本件に関しては数多の書籍や先行研究があるようですから、以下に記述したもの以外は全てそちらに譲ります。よって、私の関心に寄せたものだけを取り上げます。また、これは歴史の忠実な解説書ではなく、一片の知識として我流を以ってメモ的に纏めたものであり、過ちを指摘されても栓無きことであり、読み手の賢明な頭脳を以って修正してください。

内容の構成は以下のとおりであり、図 M-1 中の①～⑤は、次頁以降の第一部から第五部までに
対応しています。

.....

【まえがき】

《はじめに》

通し番号	部	件名
《歴史&宗教 No010-1》	第一部	①堀田村・滝山村に設定した「弘法大師八十八ヶ所」（写し） 霊場における上桜田設定分
《歴史&宗教 No010-2》	第二部	②上桜田耕源寺裏手、柏山（御立山／お寺山）の「西国三 十観音」（写し）霊場石仏群
《歴史&宗教 No010-3》	第三部	③戸神山西側山麓の「山形(?)三十三観音 or 最上(?)三十三 観音」（写し）霊場石仏群
《歴史&宗教 No010-4》	第四部	④平清水平泉寺大日堂裏手の「新四国八十八ヶ所」（写し） 霊場石仏群
《歴史&宗教 No010-5》	第五部	⑤平清水耕龍寺裏手、平清水観音堂脇の「西国三十三観音、坂 東・秩父・最上の都合百観音を合体」（写し）霊場石仏群

【あとがき】

第一部

- ①堀田村・滝山村に設定した「弘法大師八十八ヶ所」（写し）霊場における
上桜田設定分

この段は、いわゆる「四国八十八カ所霊場」の写し霊場についてであるが、長い間気になっていたものの一つです。問題意識の切っ掛けとなったことの確認から入ります。

一つ目は、上桜田神瀧山耕源寺の正門階段入口にある図1-1の「歴史の散歩道」説明版には次のように記載されていることす。「・・・また、堀田村滝山村内に設定した弘法大師八十八ヶ所の八十八番で、納めの霊場である。」

二つ目として、「伊藤孝蔵先生著コラム集（岩波町内会）」の「コラム集後編」の4頁（通しP60）には次のように記載されている内容です。

「明治四十四年八月二十日に設定された『堀田滝山八十八所霊場』がある。この霊場は金瓶を振り出しに金瓶五、上野十四、半郷十五、山田三、成沢十六、飯田七、下桜田四、元木八、青田六、中桜田四、上桜田六ヶ所で、耕源寺が八十八番目の納めに設定されていた。」

図 1-1

耕源寺
歴史の散歩道

桜の名所、今はつつじの美を讃えられ、市街地が一望におさめられる寺として、市民に親しまれてきた名刹である。

「神瀧山耕源寺」と称し、大永一享祿の頃平清水耕龍寺威州宗虎大和尚の開山による曹洞宗の寺である。いくたびかの火災にあい、寺の歴史を知る文書が失われたが再建され、現在にいたっている。

本堂の天井にえがかれた六道の絵は地獄の姿をみせており、また、位牌室には五百羅漢が安置されている。裏山には西国三十三番の霊場の石仏が並び、また、堀田村滝山村内に設定した弘法大師八十八ヶ所の八十八番で、納めの霊場である。

海上胤平の歌碑、堂裏の仏足石、それに、上桜田、佐藤半兵衛先生（好学酒楽居士）の徳利と盃を刻んだ墓は酒仙の名をとどめる

滝山地区振興協議会
平成三年度宝くじ助成品

図 1-2

八十八	上桜田	志戸田	屋島
八十七	柴田庄三郎	延命寺	長尾寺
八十六	地蔵堂	高松寺	志度寺
八十五	上桜田	志戸田	八栗寺
八十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
八十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
八十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
八十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
八十	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十九	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十八	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十七	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十六	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十五	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
七十	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十九	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十八	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十七	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十六	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十五	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
六十	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十九	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十八	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十七	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十六	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十五	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
五十	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十九	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十八	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十七	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十六	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十五	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
四十	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十九	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十八	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十七	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十六	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十五	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
三十	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十九	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十八	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十七	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十六	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十五	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
二十	上桜田	志戸田	乾徳寺
十九	上桜田	志戸田	乾徳寺
十八	上桜田	志戸田	乾徳寺
十七	上桜田	志戸田	乾徳寺
十六	上桜田	志戸田	乾徳寺
十五	上桜田	志戸田	乾徳寺
十四	上桜田	志戸田	乾徳寺
十三	上桜田	志戸田	乾徳寺
十二	上桜田	志戸田	乾徳寺
十一	上桜田	志戸田	乾徳寺
十	上桜田	志戸田	乾徳寺
九	上桜田	志戸田	乾徳寺
八	上桜田	志戸田	乾徳寺
七	上桜田	志戸田	乾徳寺
六	上桜田	志戸田	乾徳寺
五	上桜田	志戸田	乾徳寺
四	上桜田	志戸田	乾徳寺
三	上桜田	志戸田	乾徳寺
二	上桜田	志戸田	乾徳寺
一	上桜田	志戸田	乾徳寺
番	堀田滝山	山形市外二郡	四国霊場
一	金瓶齋藤徳太郎	三日町誓願寺	靈山寺
二	鈴木善作	鉄砲町勝因寺	極楽寺
三	慈照庵	勇大庵	金泉寺
四	伊東熊五郎	蔵龍院	大日寺
五	斎藤久兵衛	八日町般若院	地藏寺
六	上野横山孫吉門	鉄砲町法恩寺	安樂寺
七	武田惣吉門	龍宝院	十楽寺
八	宗福院	宗福院	熊谷寺

なお、後で良く見ると「上桜田六ヶ所」の内、霊場比定は5ヶ所で、1ヶ所は世話人であります。このような事から「具体的にどの神社・仏閣を比定したのかを知りたくなりました。明治四十四(1911)年は比較的新しい時代なので、全体的な事柄についてどなたか分かる人はいないものだろうか。」と、あの人、この人を尋ねながらもなかなか見当らず、悶々としていました。ところが、「捨てる神あれば拾う神あり」で、平成25(2013)年12月の年も押し迫った時に判明しました。

結論は本書のとおり判明しました。

その経緯とは、お隣地区の蔵王コミュニティセンターに行き相談しました、職員の石沢さんから、たまたまおられた高橋さんに声を掛けて頂き、数日後、山形市半郷町内会総代の荒井孝太より関係書類を探したという連絡があり、訪問・対面し入手して来ました。霊場本場と地元写し霊場を関連付けて一対一に対応した名簿(後記図1-5)でありました。親身になってくれた人のリレーで早期に入手出来たのです。その資料(書面)の一部抜粋が前頁図1-2のとおりであります。まさにこの資料の冒頭に「堀田・滝山弘法様八十八ヶ所霊場」とあります。この資料綴りの最後に、確かに「八八 上桜田 耕源寺」(図1-2左端)と記載されています。『青天の霹靂』なり。また、名簿を良く見ると、私が当初想定した地元の神社・仏閣ではなく、むしろ個人のお宅が殆どであります。その中から上桜田地区に関係する部分の調査を開始しました。縁日には信者や周辺の人達がお参りに来たと云う歴史も分かって来ました。さらに整理したのが、次頁図(表)1-3のとおりです。

なお、図1-2において「八五番 熊ノ山堂内 佐藤円次郎」となっているが、これには誤りがあり、当事者の話を総合すると『熊ノ山堂内』とは、現在の「熊野神社」であり、ここではその文字は「八七番 柴田庄三郎」の処に記入することが正解であります。本場の「四国(写し)霊場」と合わせて、「山形市外二郡霊場」(寺院対応)も整備し、一対一の対応を成しています。それにしても信仰心の広がり と 熱意に感心します。

通し番号 (図1-4の 写真に付定)	堀田村・滝山村に設定	山形市外二郡 霊場	四国八十八所本場霊場	
	対応する大師お堂 図1-2に記載の名称		番号	札所名
①	月山堂内(現-上桜田-月山神社) 志鎌四郎兵エ[志鎌忠雄さん宅]	志戸田 乾徳寺	84番	屋島寺
②	佐藤円次郎[佐藤和夫さん宅]	志戸田 宝光院	85番	八栗寺
③	地藏堂(現 地藏堂) [岡崎市三良さん宅]	江俣 高松寺	86番	志度寺
④	熊ノ堂内(現 熊野神社) 柴田庄三郎[柴田邦裕さん宅]	江俣 延命寺	87番	長尾寺
⑤	神瀧山耕源寺[本堂内]	薬師町 柏山寺	88番	大窪寺

図(表)1-3

この上桜田地区の5軒(個所)の処が分かって、それぞれのお宅に順次訪問し、拝観したいとお願ひした処みんなから快諾を賜りました。各家庭において図1-4写真--図(表)1-3に対応--のとおりの弘法大師像をお祀りしておりました。名簿にある5軒みんなの所に祭壇や御像お(み)ぞうがあったので

す、とても幸運に感じました。丁重に拝ませて貰いながら写真を撮らせて頂きました。長年に亘り丁寧に大切に祀り・お守りされていることに感謝と敬意を表します。集合写真に整理して当該5軒のお宅に配布しました。

いずれも見事な弘法大師空海の御像（大きさは各30cm前後×40cm前後×15cm前後）で大きさや姿・表情は異なり、それぞれの特徴を醸し出し個性を感じます。共通して柔和な顔立ち（像容）であり、まさしく弘法大師（南無大師遍照金剛）のお姿その儘であります。同じものが二つとして無い事にある面うれしくなりました。ご先祖の方、あるいは願主のそれぞれの思いを伝えて、職人から造って貰ったものだと思います。

中でも、神瀧山耕源寺は本堂内の誰でも目の着く所に安置しております、ここは曹洞宗ですが、真言宗の開祖空海（弘法大師）を手厚く祀っているのです、嬉しくなります。

皆様から快諾をして頂き、このような素晴らしい立派な弘法大師に直面出来たことに感激しています。このような庶民の神仏を拝み平伏する素朴な心を醸成する崇仏敬神が、連綿と受け繋がれて来たことはとても素晴らしいことと思います。これらが話題となって、家族間で、あるいは町内会の人と人の交流やさらなる深い親睦、融和に繋がって行くことを期待し、また願っています。

この御像は、地域・町内会の共通の宝だと思います。それぞれのお宅においては保存するということでも大事なお勤めがあるかと思えます。どうか末永く子々孫々まで繋いで行って欲しいと思えます。若い世代には今は関心が無い・薄いかと思えますが、私にも若い頃は有りませんでした。人間は歳と共に誰しもが、このような神仏のお姿に関心が出て来て、その神威・仏光の靈威に共鳴したくなります。

さて、私に願望があります。次の2点について、いずれは後世に関心ある人が出現し成就されることを期待しています。

その1；上桜田公民館において、この5体の御大師像を集合陳列し、町民に披露し、みなさんから拝観して貰うことです。

その2；次頁図1-5に記載の88か所全てを調査して貰いたいことです。

.....

感傷的な思いを遊び心でつたない短歌^{うた}にして見ました。

（弘法大師空海＝南無大師遍照金剛の神威仏光の御働き）

桜地^{さくらじ}に弘法大師舞い降りて 遍^{あまね}く照らす豊穰^{ほうじょう}台地

（弘法大師御像を営々と守護されて来た皆様への心）

密やかに弘法様をお守りし お宿の勤め熱き心ぞ

（私の率直な感想）

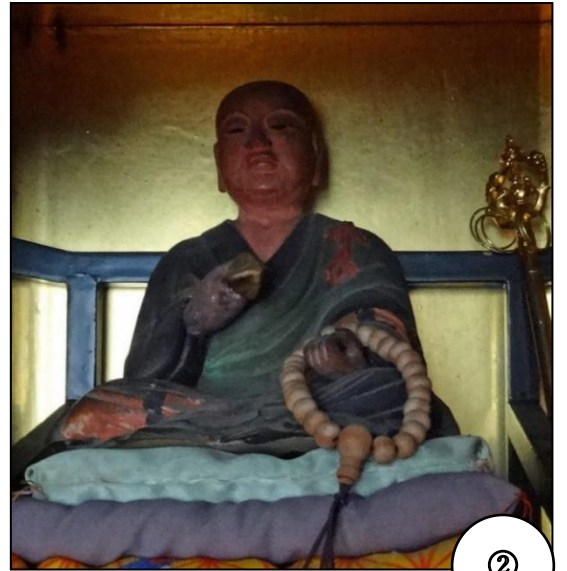
有り難や弘法様と対面し 放つ靈威に心安らぐ

.....

次頁以降に図1-5として、頂戴した資料の写しを掲載します。



①



②



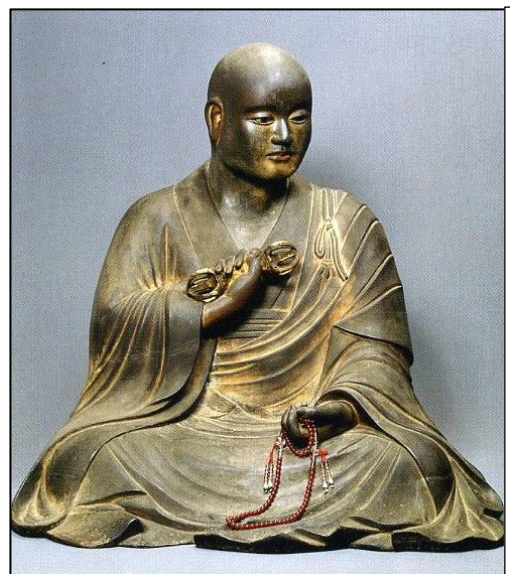
③



④



⑤



高野山金剛峯寺所蔵の弘法大師像

図 1-4

一	半郷荒井志巾	七日町大龍寺	竹林寺
二	高橋庄次郎	長源寺	禪師峰寺
三	岡崎守左門	一卜町普門寺	雪溪寺
四	安養寺	金剛院	種間寺
五	山田横山孫右門	六日町秀藏寺	清滝寺
六	荒井利七	小橋町松岩寺	青龍寺
七	荒井鶴治	大林寺	岩本寺
八	成沢三沢庄太郎	肴町青林寺	金剛福寺
九	三沢与三郎	十三仙堂	延光寺
〇	廣谷寺	下茶町清淨院	觀自在寺
一	山口庄六	伝昌寺	龍光寺
二	長岡利七	皆川町龍門寺	仏木寺
三	鏡寅吉	正覚寺	明石寺
四	荒井権太郎	月山寺	大宝寺
五	板垣松之助	宮町慈光寺	岩屋寺
六	秋葉金次郎	養藏寺	淨瑠璃寺
七	八柳栄吉	実藏院	八坂寺
八	庄司清太郎	円光寺 円心寺	西林寺

四	九成沢板垣	銀六	小白川等覚院	浄土寺
五	〇	源福寺	西光寺	繁多寺
一	庄司助右工門	釈迦堂石井興次夫	石手寺	
二	庄司	ふみ	法來寺	太山寺
三	前田	ふく	下室沢妙泉寺	円明寺
四	飯田前田	九藏	妙見寺養千寺	延命寺
五	前田	孫右門	千歳山万松寺	南光坊
六	前田	孝七	耕龍寺	泰山寺
七	觀世音	平清水	平泉寺	榮福寺
八	佐藤兼吉	不動堂	仙遊寺	
九	金大日 天不那 兵工	小立	毘沙門堂	園分寺
〇	前田	利 <small>八</small> 石波	石行寺	横峰寺
一	下留佐藤	長吉 <small>上見</small>	上桜田耕源寺	香園寺
二	阿弥陀堂	中桜田	觀山寺	宝壽寺
三	塩野由藏 <small>明</small>	印後	長松寺	吉祥寺
四	遠藤與吉 <small>福</small>	成沢	源福寺	前神寺
五	元木丹野安太郎	廣谷寺	三角寺	
六	丹野長吉	半郷安養寺	雲辺寺	

六七	元木 斎藤	松蔵	半郷	松尾山	大興寺
六八	渡辺 武八	"	斯波清斎	神恵寺	
六九	岡崎 弥八	千石	高仙寺	観音寺	
七〇	峯田 佐平治	イトメ	古峰堂	本山寺	
七一	峯田 栄太郎	高松	観音堂	弥谷寺	
七二	青田 観音堂	カタマチ	西光寺	曼荼羅寺	
七三	阿部 利八	上山	寿仙寺	出釈迦寺	
七四	阿部 惣左門	"	観音堂	甲山寺	
七五	善光寺	長谷堂	慈眼庵	善通寺	
七六	川田 伊兵工	"	長光院	金倉寺	
七七	元木 観音堂	"	清源寺	道隆寺	
七八	青田 川田 久助	柏倉	不動堂	郷照寺	
七九	中桜田 佐藤 源助	菅沢	沢泉寺	天皇寺	
八〇	鏡 金谷 神室内 庄助	門伝	長泉寺	国分寺	
八一	延命地蔵堂内 鏡 長作	大塚	威徳院	白峰寺	
八二	川田 佐惣治	及田	観音堂	根香寺	
八三	龍山寺	榎沢	教覚院	一宮寺	
八四	上桜田 志録 四世兵工	志戸田	乾徳寺	屋島寺	

八五	上桜田 佐藤 可次郎	志戸田 宝光院	八栗寺	
八六	地蔵堂	江俣 高松寺	志度寺	
八七	柴田 庄三郎	"	延命寺	長尾寺
八八	耕源寺	薬師町 柏山寺	大窪寺	
堀田 滝山 八十八ヶ所御詠歌通路				
明治四十四年八月廿日 世話人				
金瓶 鈴木 善作	上野 武田 惣左門	下桜田 佐藤 長		
今 守谷 伝右門	半郷 斯波 清斎	青田 阿部 利		
成沢 庄司 慶太郎	山田 横山 孫左門	元木 丹野 長		
今 三沢 庄太郎	飯田 山口 幸七	中桜田 鏡作 兵		
上桜田 志録 喜助				

御詠歌は、堀田龍山の霊場も、山形市外二郡の霊場
 四国霊場の御詠歌をそのまゝ使っている。

第二部

②上桜田耕源寺裏手、柏山（御立山／お寺山）の「西国三十三観音」（写し）
霊場石仏群

その1； 耕源寺裏手（東側）の御立山（柏山／お寺山）の中腹から山頂近く（図2-1aのここ）にかけて「西国三十三観音」の写し霊場があります。同図bは西側斜面に見える雪で白くなったジグザグは道筋であり、この周辺に安置されています。地元では岩観音と呼ばれています。

耕源寺正面石門柱を潜り本堂への正面階段の途中に図2-2の石碑があり、その正面には、同図左のと通りの刻字があります。また、ここには記載しないが、この石の右面（南面）にはびっしりと寄進者の氏名が、左面（北面）には耕源寺の住職に係る刻字があります。

なお、図2-2刻字中の「二世」とは、「現当二世」のことであり、現在世と当来世（現在と未来）を合せて言う仏教用語のことです。

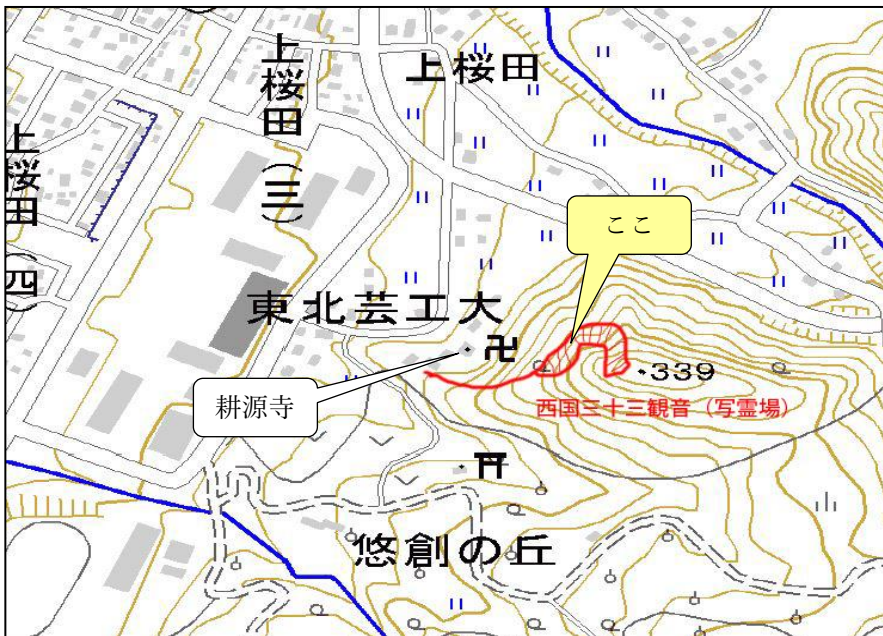


図2-1 a



図2-1 b

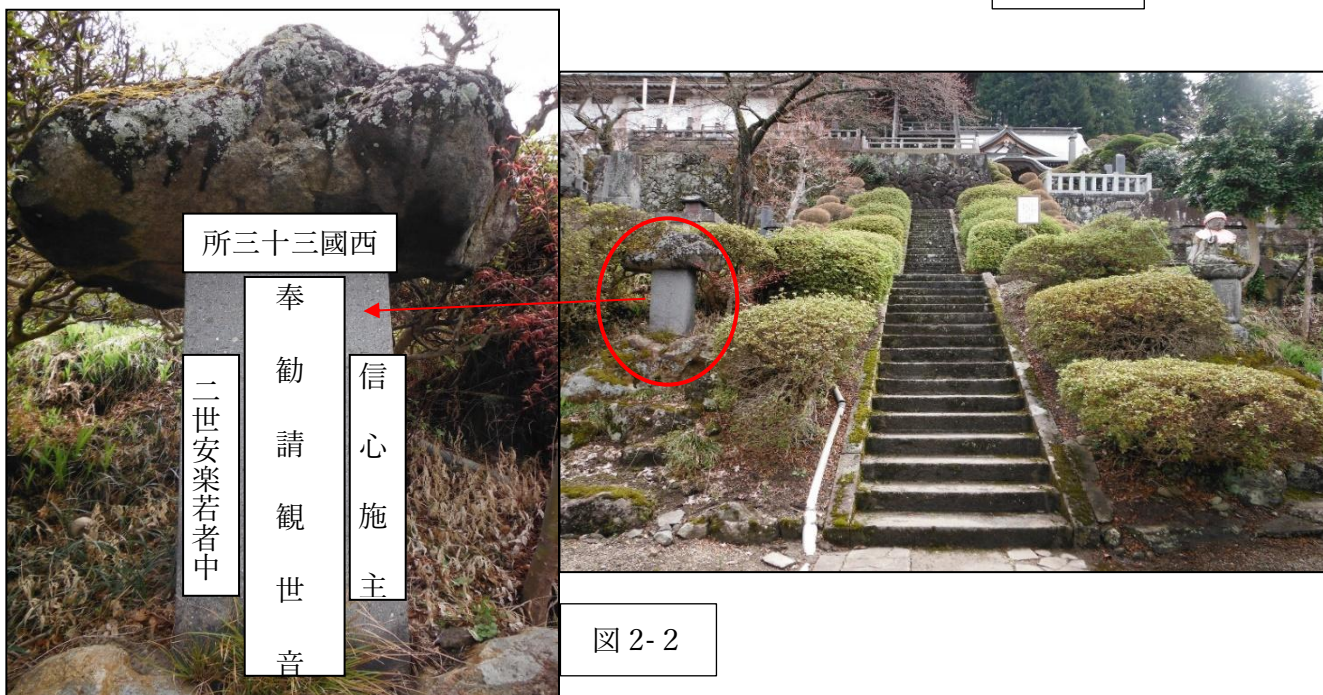


図2-2

その2；図2-3は、耕源寺庫裡建物南側の霊場入り口にあり、正面（西面）に「西国参拾参番観世音菩薩霊場入口」と刻字された案内碑（石柱）であります。その奥に、窓の空いた所に石仏が安置されたものがあります。拡大し正面から見たのが図2-4上、その裏側は同図下写真となります。

この石塔にはいろいろ刻字されているが、その一部は次のとおりです。

この如意輪観音像の枠下に「西国第一番」、同像の後ろ下部に「明治十三年八月〇日、村ノ 舟越作兵エ 施主 母の志 石工 舟越〇〇」と刻字されています。

なお、西国本場の一番札所は、那智山青岸渡寺で、本尊はこと同じく如意輪観世音菩薩であります。

山頂に向かってジグザクしながら登って行くが、半分程の3曲目からはかなり急斜面であり、ロープなどの手摺りは無い上に、乾燥している時でも足元が滑り易く危ない状況にあります。石仏の設置場所は急斜面の不安定に見えながら、幾多の地震に遭遇しながらも、あるいは積雪の重圧に耐えてきちんと安置しています。

また、石仏は西側、つまり西方極楽浄土の彼方を向いています。なお、数体は転げ落ちたのか、33体より数体少なかったような気がするが、その後引き上げてくれたらうか。

昨今は、定期的なお参りを行う人は殆どいないと聞いています。

図2-5は、複数体が纏まって安置されている所です。図2-6は二体を拡大したものであるが、その右は「二七」番で、台座には「村ノ伝助 利七 長七」と刻字されています。



図 2-3

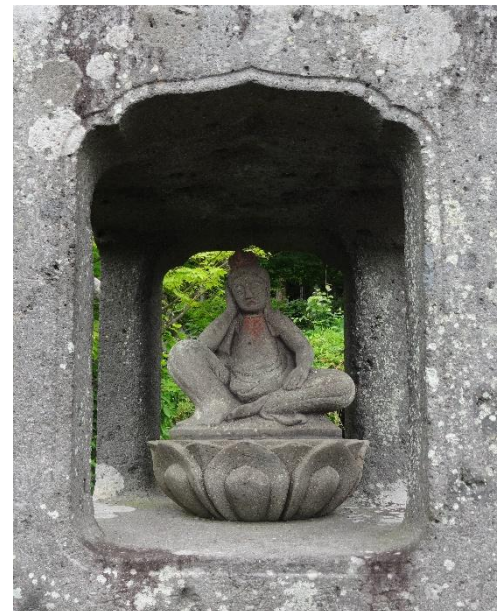


図 2-4



図 2-5



図 2- 6



図 2- 7

図 2-7 は本写し霊場の終端部で、かつ、この山の山頂付近に設置されています「古峯神社（火伏の神）」、「黄金山大神――宮城県の西北部牡鹿半島の突端に続く島の中央に同名の山が聳える金華山に祀られている神様、金銀財宝の守護神――」の石柱があります。

ここにおいても、神仏習合の霊地を醸し出しています。

その 3；後記の図 2-8 ab は上桜田の遠藤(asako)さんから、図 2-9 abc は上桜田の舟越(eiko)さん頂戴した資料です。なお、その資料は、ワープロ文字などから近年に作成したものと思われます。

○明治十五年（1882 年）耕源寺第 16 世 祖芳太禅代 大和尚の時に安置し、最初の世話人（発起人）として、上桜田 5 人、中桜田 3 人の氏名が記載されている。なお、前記のとおり、「西国第一番」は明治十三年と刻字されていることから、明治十五年は全部の完成年と推測される。

○一つの石仏について、1 名から最多 6 名の寄進者が見える。

○仏像制作に共鳴した寄進者は 70 人ほどいたとして、上桜田・中桜田・南館・八日町・銅町・下條・三日町・上山・小立・舟町の広範囲・多くの集落名が記載されている。

○石工は不明である。

西国33ヶ所観世音仏像寄進者名簿

耕源寺16世。祖芳太禅代

明治15年 4月9日 故佐藤友信氏による

番数	寺名	仏名	寄進者
1	那智山	如意輪観世音	作兵衛。
2	記三井寺	11面観世音	作兵衛。 清六。
3	粉川寺	千手千眼観世音	清兵衛。
4	槇尾三	千手千眼観世音	八良兵衛。
5	藤井寺	11面千手千眼観世音	五良兵衛。清太良。
6	壺坂寺	千手千眼観音	喜四良。喜六。
7	岡 寺	二臂如意輪観世音	太兵衛。
8	長谷寺	11面観世音	五右衛門。
9	南円堂	八臂観世音	長吉。長六。長三。 (南館)
10	三室戸寺	二三臂千手観世音	定吉。 (小立)
11	醍醐寺	准底観世音	儀兵衛。権兵衛。吉兵衛
12	岩間寺	千壽観世音	儀兵衛。源吉 (三日町)
13	石山寺	二臂如意輪観世音	六兵衛。
14	三井寺	如意輪観世音	梅吉。
15	今熊野	11面観世音	権蔵。四良治。
16	清水寺	11面千手千眼観世音	権四良。吉蔵。円蔵。清四良。
17	六波羅堂	11面観世音	伝五良。源次良。喜兵衛。
18	六角堂	六臂如意輪観世音	藤作。 (銅町)
19	革 堂	千手観世音	喜之助。甚助。多吉。
20	善峯寺	千手千眼観世音	与惣治。
21	穴太寺	聖観世音	吉右衛門。彦右衛門。
22	総持寺	千手観世音	藤右衛門。清三良
23	勝尾寺	11面観世音	源七。吉五良。
24	中山寺	二臂11面観世音	藤十良。九右衛門。源太良。彦右衛門
25	清水寺	11面千手観世音	久七。
26	一乗寺	聖観世音	伝助。利七。長七
27	円教寺	如意輪観世音	半七。
28	成相寺	聖観世音	角治
29	松尾寺	馬頭観世音	伝治良。弥兵衛。

図 2-8 a

西国 33ヶ所観世音仏像寄進者

番数	寺名	仏名	寄進者
30	本業寺	千手千眼観世音	久太良
31	長命寺	千手11面聖観世音	権蔵。源作。徳太良。善作。源治。南平。
32	観音庄寺	千手千眼観世音	権蔵。
33	華厳寺	11面観世音	六右衛門。長作。七右衛門。久四良。
33	谷汲寺	とも言う。	八右衛門。権蔵。

明治15年最初の世話人

上櫻田

中櫻田

舟越作兵衛

鏡 久七。

佐藤儀兵衛。

相馬権蔵。

佐藤権蔵。

沼沢伝五郎。

柴田藤右衛門。

岡崎清三郎。

この人達は発起人なのかも。

部落名は次ぎの通り。 上櫻田 中櫻田 南館 八日町 銅町

下条 三日町 上ノ山 小立 舟町

仏像に共鳴する人の名は70名を数える事が出来る。

石工は誰かはわからない。

図2-8b

西国三十三ヶ所 柏山岩観音奉賛会
神竜山耕源寺

第一番 那智山 青岸渡寺 如意輪観世音

寄進者 作兵衛 舟越栄子 (京次) 上桜田

御詠歌

普陀落や、岸打つ波は、み熊野の那智のお山に響く滝つ瀬

第二番 記三井山 金剛宝寺 十一面観世音

寄進者 作兵衛 舟越栄子 (京次) 上桜田

清六 佐藤庄一 相沢氏の所

御詠歌

故郷を、はるばるここに、記三井寺花の都も近くなるらん

第三番 風猛山 粉河寺 千手千眼観世音

寄進者 清兵衛 渡辺裕人 上桜田

御詠歌

父母の、恵みもふかき、粉河寺仏の誓いたのもしのみや

第四番 槇尾山 施福寺 千手千眼観世音

寄進者 八良兵衛 佐藤充信 上桜田

御詠歌

深山寺や、松原松原、わけゆけば槇のお寺に駒ぞいさめる。

第五番 紫雲山 渴井寺 十一面千手千眼観世音

寄進者 五良兵衛 佐藤喜蔵

清太良 佐藤秀雄

御詠歌

まいるより、たのみをかくる、ふじい寺花のうてなに紫の雲。

(一)

第六番 壺坂山 南法華寺 座像 千手千眼観世音

寄進社 喜四良 伊藤喜四郎 上桜田

喜六 伊藤喜六 上桜田

御詠歌

岩をたて水をたたえて、壺坂の庭のいきこも浄土なるらん。

第七番 東光山 岡寺 二臂如意輪観世音

寄進社 太兵衛 船越庄次郎 上桜田

御詠歌

今朝見れば、つゆ岡寺の、庭の苦さながら瑠璃の光りなりけり

第八番 豊山 長谷寺 十一面観世音

寄進社 五右衛門 志鎌喜市 上桜田

御詠歌

いくたびも、参る心は。はつせでらやまもちかいも深き谷川

第九番 興福寺 南円堂 不空けん索三目八臂観世音

寄進社 長吉 南館

長六 南館

長三

御詠歌

春の日は、南円堂に、かがやきて三笠の山にはるる薄雲

第十番 明星山 三室戸寺 二三臂千手観世音

寄進社 定七

御詠歌

よもすがら、月を三室戸わけゆきは宇治の川瀬にたつは白波

(一)

図 2-9a

第十一番 深雪山 上醍醐寺 准低観世音
寄進者 儀兵衛 佐藤文勇

権兵衛
吉兵衛

御詠歌

逆縁も、もらさですくう、願なれば准低堂はたのもしきかな

第十二番 岩間山 正法寺 千寿観世音

寄進者 儀兵衛 佐藤文勇

源吉

御詠歌

水上は、いつくなるらん、岩間寺岸打つ波は松風の音

第十三番 石光山 石山寺 二臂如意輪観世音

寄進者 六兵衛 渡辺 佐藤個性氏の前の家主

御詠歌

後の世を、願う心は、かろくとも仏の誓いおもき石山

第十四番 長等山 三井寺 如意輪観世音

寄進者 梅吉 船越順悦

御詠歌

いでいるや、波間の月を『三井寺の鐘の響きにあくるみずうみ

第十五番 新那智山 観音寺 十一面観世音

寄進者 権蔵 佐藤忠男

四良治

御詠歌

昔より、たつともしらぬ、いまぐまの仏の誓い新たなりけり

(三)

第十六番 音羽山 清水寺 楊柳十一面千手眼観世音
寄進者 権四良 鏡

吉蔵

円蔵

清四良

御詠歌

松風や、音羽の滝の、清水をむすぶ心はずしかるらん

第十七番 普陀洛山 六波羅蜜寺 十一面観世音

寄進者 伝五良 沼沢利雄

源次良

喜兵衛

御詠歌

おもくとも、いつつの罪は、よもあらし六波羅堂へまいる身なれば

第十八番 紫雲山 六角堂頂法寺 六臂如意輪観世音

寄進者 藤作 銅町

御詠歌

吾が思う、心のうちは、六つの角ただまろかれと祈るなりけれ

第十九番 霊鹿山 一條革堂行願寺 千手観世音

寄進者 喜之助 佐藤喜之助

甚助

多吉

御詠歌

花を見て、今は望みも、草堂の庭の千草も盛りなるらん

(四)

図 2-9b

第二十番 西山 善峯寺 千手千眼観世音

寄進者 与惣治 佐藤利喜弥 上桜田

御詠歌

野をもすぎ。山路にむかう、雨の空善峰よりも晴るる夕立

第二十一番 菩提山 穴太寺 聖観世音

寄進者 吉右衛門 柴田吉之助 上桜田

彦右衛門 鏡 中桜田

御詠歌

かかる世に、生まれ会う身の、穴うやとおもわでたのためと声いと声

第二十二番 普陀洛山 総持寺 千手観世音

寄進者 藤右衛門 柴田藤右衛門

清三良 岡崎悦三郎 上桜田

御詠歌

おしなべて、老いも若きも、総持寺の仏の誓いたのまぬはなし

第二十三番 慶頂山 勝尾寺 十一面観世音

寄進者 源七 遠藤幸雄

吉五良

御詠歌

重くとも、罪にはのりの、勝尾寺仏をたのむ身こそやすけれ

(五)

第二十四番 紫雲山 中山寺 二臂十一面観世音

寄進者 藤十良 沼沢繁 中桜田

九右衛門 沼沢義雄 中桜田

源太良 中桜田

彦右衛門 鏡 中桜田

御詠歌

野をもすぎ、里をも行きて、中山の寺へまいるはのちのよのため

第二十五番 御嶽山 清水寺 十一面千手観世音

寄進者 久七 鏡 中桜田

御詠歌

哀れみや、あまねきかどの、しなじなになにをかなみのここに清

水

第二十六番 法華山 一乗寺 聖観世音

寄進者 伝助 荒井治幸 上桜田

利七 荒井俊作 上桜田

長七 舟越俊男

御詠歌

春は花、夏は橘、秋は菊いつもたえなるのりの花山

第二十七番 書写山 円教寺 如意輪観世音

寄進者 半七 舟越孝一

御詠歌

はるばると、登れば書写の、山おろし松の響きも実りなるらん

(六)

本件に係る瀧山史談掲載分を 2-10 に取り上げる。

(1) 第19号 平成30年3月15日

所在地	遺立地	名称(本場)	総高
入口	西国第一番	如意輪観音	230
	二番	十一面観音	69
I群	三番	千手千眼	85
	四番	十一面観音	60
	五番	十一面観音	61
	廿八	聖	62
	不明		54
	不明		59
	不明		60
II群	六番	千手観音	63
	七番	如意輪観音	63
	八番	聖観音	61
	十三	千手観音	65
	十七	十一面観音	62
	廿七	聖観音	49
	卅二	千手千眼	63
III群	九番	不空羂索	56
	十二	千手	61
	十五番	十一面観音	62
	十六番	十一面千手千眼	63
	不明		69
	十八番	如意輪観音	60
	十九	千手	65
	二十	千手	60
	廿一	聖	61
	廿二	千手	61
IV群	十四	如意輪観音	63
	廿五	十一面観音	60
V群	廿七(重複?)		50
	廿九	馬頭観世音	62
	三十	千手千眼	66
	卅一	千手十一面聖観音三尊一体	65
	三十三番	十一面観音	72

神龍山 耕源寺

西国参拾参番観世音菩薩 霊場調査報告

耕源寺の後背のようにそり立つ山に配置された西国参拾参番観世音菩薩霊場の調査途中報告である。入口の第一番は如意輪観音で総高二米三〇厘の堂々たる塔である。銘文に「明治十三年八月一日建立村

ノ船越」とあり上桜田の方が施主であると解る。二番から三十三番までの銘文にも、「村ノ」(上桜田)と刻まれたものが多くみられ、「中ノ」(中桜田)、小立など近在のもの。また「八日町」「銅

古峯神社
黄金山大神
台座

第VI群
卅九 卅十 卅一 卅二 卅三 卅四 卅五 卅六 卅七

第V群
廿九 三十 卅一 卅二 卅三 卅四 卅五

第IV群
十四

第III群
十五 十六 十七 十八 十九 二十 廿一 廿二 廿三 廿四 廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十 卅一 卅二 卅三 卅四 卅五 卅六 卅七 卅八 卅九 四十

第II群
七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 廿一 廿二 廿三 廿四 廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十 卅一 卅二 卅三 卅四 卅五 卅六 卅七 卅八 卅九 四十

第I群
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 廿一 廿二 廿三 廿四 廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十 卅一 卅二 卅三 卅四 卅五 卅六 卅七 卅八 卅九 四十

霊場入口

廿九番

三十番

廿五番

九番

四番

西国第一番

町、「それに「上ノ山」と刻まれたものもあった。急峻な勾配をもつとせず建立した施主の信仰と先祖に対する心の深さを感じられる。

確認不可	10	千手	
	11	准てい	
	24	十一面観音	
	26	聖	

瀧山史談

第十九号

瀧山郷土史研究会

事務局
990-2201 山形市上桜田
1-1-17-216
瀧山コミュニティセンター内
瀧山郷土史研究会
TEL (023) 622-3401
FAX (023) 635-0967
印刷 中央印刷株式会社

図 2-10

第三部

③戸神山西側山麓の「山形(?) 三十三観音 or 最上(?) 三十三観音」
(写し) 霊場石仏群／毘沙門堂石仏群

場所は図3-1の戸神山西面の麓（ここ）にあります。

図3-2の写真は、県道53号線の小桜橋の所から撮影した戸神山西面の石仏安置場所です。図3-3のように石仏三十三体が祀られています。「西方極楽浄土の世界」を意識し、ほぼ真西を向いています。なお、図3-2において、石仏群西隣の杉林の中には毘沙門天を祀る神社があります。

岩波などの人達が寄進者（施主）となって設置したようであります。面白い（奇異な）話があります、いろんな人達に聞いて見ると、「山形三十三観音（の写し）」と言う人達と、「最上三十三観音（の写し）」と言う人達がいます。それも歴史分野に造詣の深い方々――[お世辞！]――でも認識が分かれています。果たしてどちらなのか？
あるいはどこかの写し霊場なのか？

平成26（2014）年3月24日
（月）、願主（施主？）の方にお会いして直接確認した処の第一発声は
「最上三十三観音????」であったが、自ら疑問を呈し、「待てよ、お蔵の書類を探さないと、どこのものを祀っているのか、分からない、自信を持ってない。」とのことでした。



図3-1



図3-2



図3-3

そこで、この霊場の特定化を図るべく考察・検証を行って見ました。

寄進者として直接係った家（人）が居れば良いと思い、この石仏の周辺地区の家をいろいろと尋ね



(正面の刻字は右のとおり)

念仏講中

廿七番（如意輪観音像）

岩波村

伊藤エミ?

河合シウ?

佐藤スキ?

るに当り、手掛かりになる石仏がないか探したら、図3-4のとおり、施主を岩浪村の三人とするもの（廿七番）を発見しました。右側から佐藤スキ・河合シウ・伊藤エ（ユ）ミさんと刻字されているようであり、この家を探せば良いのですが、現時点では探しあぐねています。なお、個々の石仏に年号（年代）に繋がる刻字は見当たらないのが残念です。

そこで、別の角度から検証してみました。どちらの霊場を模したものなのか、まずは、本家本元の霊場のご本尊を再確認して見ることにしました。

まずは、余り馴染みが薄いと思われる「山形三十三観音」から始めます。きちんとした根拠となる裏付け資料が必要であることから、いろいろ探したあげく、山形市鉄砲町の三番札所「勝因寺」に赴き案内パンフレットを入手しました。その中の一覧を図(表)3-5に示します。ご本尊を概観すれば、聖観世音が殆ど、圧倒的に多くなっています。

なお、このパンフに依れば、——「山形三十三観音」の起源に

刻字最下部の氏名の部分を拡大すると以下のとおり。

左側

右側



中央



図3-4

については、定かではないが、最上三十三観音巡礼を無事満願した人（住職か？）がおり、身近なこの山形の地においても、何時でも参拝・巡礼出来るようにしたい、とする願いから始まったとされています。——これらからは、標記場所の石仏は最上三十観音霊場の写しだろう、という思いにはなりません。

ところがまだ断定は早い！ 「山形三十三観音」は、「最上三十三観音」を模したものである、同じものである、とはどこにも書かれていません。

山形三十三観音一覽表

札番	寺院名	本尊	住所
33	圓心寺	聖観世音	宮町四一十六一三十三
31	傳昌寺	聖観世音	下条町四一三一六十
29	大聖院	聖観世音	錦町十四
27	浄光寺	千手世音	相生町八一二十六
25	極楽寺	聖観世音	六日町九一八
23	大龍寺	聖観世音	七日町五一十六一六
21	法祥寺	聖観世音	七日町四一八一三十五
19	地藏院	聖観世音	東原町一十二一三
17	誓願寺	聖観世音	八日町二一五一十六
15	常林寺	聖観世音	諏訪町二一五一十二
13	子安観音堂	聖観世音子安観音	東原町三一三一二十八
11	正明寺	千手観世音	十日町三一八一三十三
9	般若院	十一面観世音	八日町一三一四十二
7	正徳寺	聖観世音	上町二一三一
5	法恩寺	聖観世音	八日町二一三一四十五
3	勝因寺	聖観世音	鉄砲町一四一八
1	宗福院	聖観世音	鉄砲町一三一二十
札番	寺院名	本尊	住所
32	龍門寺	聖観世音	北山形二一三一七
30	清浄院	聖観世音	下条町四一三一八
28	松岩寺	聖観世音	錦町十三一十八
26	大林院	十一面観音	宮町一三一十九
24	長源寺	聖観世音	七日町三一三一五
22	建昌寺	聖観世音	七日町四一四一十六
20	来迎寺	聖観世音	七日町四一四一十六
18	専念寺	如意輪観音	小姓町四一十八
16	常念寺	聖観世音	三日町二一八一十八
14	法昌院	聖観世音	諏訪町二一四一十八
12	聖徳寺	如意輪観音	三日町一四一三
10	實相寺	聖観世音	十日町三一八一四十五
8	静松寺	馬頭観世音	五日町二一十
6	法光院	聖観世音	八日町二一三一五十七
4	勇大庵	聖観世音	鉄砲町一三一十三
2	蔵龍院	聖観世音	八日町二一四一六十

図(表)3-5

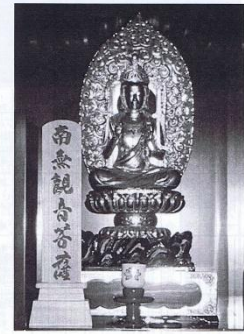
図(表)3-5の本尊とその個体数を数えると図(表)3-6のとおりです。

本尊計	聖観世音	十一面観世音	千手観世音	如意輪観世音	馬頭観世音
個体数 (33)	26 (78.7%)	2 (6.0%)	2	2	1

図(表)3-6

山形三十三観音霊場

案内パンフレット



2014(126)年4月22日(火)午後
勝因寺(3番)さん入り

ところで、図(表)3-5パンフはワープロで作成し、A5判表紙を入れて33頁に亘る大作で、「勝因寺」の息子さんが小学校6年生の時の宿題として纏めたということでした。

最上三十三観音 札所一覽

<p>❶ 若松 聖観世音 鈴立山 若松寺 天童市山元 2205 1 ☎023-653-4138 千手観世音 宝珠山 千手院 山形市山寺 4753 ☎023-695-2845</p>	<p>❸ 千手堂 千手観世音 守国山 吉祥院 山形市千手堂 509 ☎023-684-8026 聖観世音 大慈山 圓應寺 山形市富町 4 18 33 ☎023-622-3937</p>	<p>❷ 山寺 聖観世音 山形市山寺 4753 ☎023-695-2845 千手観世音 宝珠山 千手院 山形市山寺 4753 ☎023-695-2845</p>	<p>❹ 圓應寺 聖観世音 大慈山 圓應寺 山形市富町 4 18 33 ☎023-622-3937 聖観世音 唐松山 護国寺 山形市祝遊堂 7 ☎023-629-2313(2405)</p>	<p>❺ 唐松 聖観世音 唐松山 護国寺 山形市祝遊堂 7 ☎023-629-2313(2405) 十一面観世音 清水山 耕龍寺 山形市平清水 95 ☎023-631-7570</p>	<p>❻ 平清水 十一面観世音 清水山 耕龍寺 山形市平清水 95 ☎023-631-7570 十一面観世音 新福山 石行寺 山形市葉波 114 1 ☎023-641-6514</p>	<p>❼ 岩波 十一面観世音 新福山 石行寺 山形市葉波 114 1 ☎023-641-6514 聖観世音 六楮山 宗福院 山形市鉄砲町 1 2 20 ☎023-631-0048</p>	<p>❽ 六楮 聖観世音 六楮山 宗福院 山形市鉄砲町 1 2 20 ☎023-631-0048 聖観世音 金峰山 松尾院 山形市蔵王平塚 2 ☎023-688-3328</p>	<p>❾ 松尾山 聖観世音 金峰山 松尾院 山形市蔵王平塚 2 ☎023-688-3328 聖観世音 水岸山 観音寺 上山市十日町 9 29 ☎023-672-1421</p>	<p>❿ 上ノ山 聖観世音 水岸山 観音寺 上山市十日町 9 29 ☎023-672-1421 聖観世音 高松山 光明院 上山市高松 53 ☎023-672-0440</p>	<p>⓫ 高松 聖観世音 高松山 光明院 上山市高松 53 ☎023-672-0440 十一面観世音 長谷山 長光院 山形市長谷堂 23 3 ☎023-688-5901</p>	<p>⓬ 長谷堂 十一面観世音 長谷山 長光院 山形市長谷堂 23 3 ☎023-688-5901 聖観世音 観音山 常福寺 東村山郡山辺町三河原 23 ☎023-665-7716</p>	<p>⓭ 三河村 聖観世音 観音山 常福寺 東村山郡山辺町三河原 23 ☎023-665-7716 千手観世音 金剛山 正法寺 東村山郡中山町岡 102 1 ☎023-662-2536</p>	<p>⓮ 岡村 千手観世音 金剛山 正法寺 東村山郡中山町岡 102 1 ☎023-662-2536 十一面観世音 京集山 観音寺 寒河江市築後 2494 1 ☎0237-86-4308</p>	<p>⓯ 落裳 十一面観世音 京集山 観音寺 寒河江市築後 2494 1 ☎0237-86-4308 十一面観世音 長岡山 長念寺 寒河江市丸内 2 4 19 ☎0237-86-0016</p>	<p>⓰ 落裳 十一面観世音 京集山 観音寺 寒河江市築後 2494 1 ☎0237-86-4308 十一面観世音 長岡山 長念寺 寒河江市丸内 2 4 19 ☎0237-86-0016 十一面観世音 寒江山 長登寺 西村山郡西川町徳合乙 142 ☎0237-74-3853</p>	<p>⓱ 長岡 十一面観世音 長岡山 長念寺 寒河江市丸内 2 4 19 ☎0237-86-0016 十一面観世音 寒江山 長登寺 西村山郡西川町徳合乙 142 ☎0237-74-3853 聖観世音 恵日山 慈眼院 西村山郡河北町雲本 570 ☎0237-72-3191</p>	<p>⓲ 長登 十一面観世音 寒江山 長登寺 西村山郡西川町徳合乙 142 ☎0237-74-3853 聖観世音 恵日山 慈眼院 西村山郡河北町雲本 570 ☎0237-72-3191 十一面観世音 東根山 秀重院 東根市本丸第 2 10 2 ☎0237-42-4748</p>	<p>⓳ 長登 十一面観世音 寒江山 長登寺 西村山郡西川町徳合乙 142 ☎0237-74-3853 聖観世音 恵日山 慈眼院 西村山郡河北町雲本 570 ☎0237-72-3191 十一面観世音 東根山 秀重院 東根市本丸第 2 10 2 ☎0237-42-4748 聖観世音 青蓮山 清浄院 村山市小松沢 8500 ☎0237-55-6171(寺院用)</p>	<p>⓴ 黒鳥 十一面観世音 東根山 秀重院 東根市本丸第 2 10 2 ☎0237-42-4748 聖観世音 青蓮山 清浄院 村山市小松沢 8500 ☎0237-55-6171(寺院用) 聖観世音 如金山 善覚寺 尾花沢市五十沢 488 ☎0237-22-2582</p>	<p>⓵ 小松沢 聖観世音 青蓮山 清浄院 村山市小松沢 8500 ☎0237-55-6171(寺院用) 聖観世音 如金山 善覚寺 尾花沢市五十沢 488 ☎0237-22-2582 聖観世音 祥雲山 龍護寺 尾花沢市塩沢 925 1 ☎0237-28-2331</p>	<p>⓶ 五十沢 聖観世音 如金山 善覚寺 尾花沢市五十沢 488 ☎0237-22-2582 聖観世音 祥雲山 龍護寺 尾花沢市塩沢 925 1 ☎0237-28-2331 聖観世音 光沢山 円照寺 尾花沢市六沢 741 3 ☎0237-28-2319</p>	<p>⓷ 延沢 聖観世音 祥雲山 龍護寺 尾花沢市塩沢 925 1 ☎0237-28-2331 聖観世音 光沢山 円照寺 尾花沢市六沢 741 3 ☎0237-28-2319 聖観世音 宝沢山 薬師寺 尾花沢市上柳沢戸 207 ☎0237-28-2437</p>	<p>⓸ 六沢 聖観世音 光沢山 円照寺 尾花沢市六沢 741 3 ☎0237-28-2319 聖観世音 宝沢山 薬師寺 尾花沢市上柳沢戸 207 ☎0237-28-2437 聖観世音 弘誓山 養泉寺 尾花沢市琴町 2 4 6 ☎0237-22-0669(1763)</p>	<p>⓹ 上ノ畑 聖観世音 宝沢山 薬師寺 尾花沢市上柳沢戸 207 ☎0237-28-2437 聖観世音 弘誓山 養泉寺 尾花沢市琴町 2 4 6 ☎0237-22-0669(1763) 聖観世音 川前 観音堂 北村山郡大石田町川前 114</p>	<p>⓺ 上ノ畑 聖観世音 宝沢山 薬師寺 尾花沢市上柳沢戸 207 ☎0237-28-2437 聖観世音 弘誓山 養泉寺 尾花沢市琴町 2 4 6 ☎0237-22-0669(1763) 聖観世音 川前 観音堂 北村山郡大石田町川前 114 聖観世音 深堀 観音堂 北村山郡大石田町豊田 858 1</p>	<p>⓻ 尾花沢 聖観世音 弘誓山 養泉寺 尾花沢市琴町 2 4 6 ☎0237-22-0669(1763) 聖観世音 川前 観音堂 北村山郡大石田町川前 114 聖観世音 深堀 観音堂 北村山郡大石田町豊田 858 1 千手観世音 塩沢山 曹源院 北村山郡大石田町橋山 327 1 ☎0237-35-2262</p>	<p>⓼ 川前 聖観世音 川前 観音堂 北村山郡大石田町川前 114 聖観世音 深堀 観音堂 北村山郡大石田町豊田 858 1 千手観世音 塩沢山 曹源院 北村山郡大石田町橋山 327 1 ☎0237-35-2262 聖観世音 石水山 西光寺 北村山郡大石田町大石田乙 892 1 ☎0237-35-2364</p>	<p>⓽ 深堀 聖観世音 深堀 観音堂 北村山郡大石田町豊田 858 1 千手観世音 塩沢山 曹源院 北村山郡大石田町橋山 327 1 ☎0237-35-2262 聖観世音 石水山 西光寺 北村山郡大石田町大石田乙 892 1 ☎0237-35-2364 聖観世音 鷹尾山 般若院 尾花沢市丹生 1699 ☎0237-22-2175</p>	<p>⓾ 塩ノ沢 千手観世音 塩沢山 曹源院 北村山郡大石田町橋山 327 1 ☎0237-35-2262 聖観世音 石水山 西光寺 北村山郡大石田町大石田乙 892 1 ☎0237-35-2364 聖観世音 鷹尾山 般若院 尾花沢市丹生 1699 ☎0237-22-2175 馬頭観世音 浪高山 東善院光清寺 最上郡最上町菅沢 1378 ☎0233-45-2217</p>	<p>⓿ 塩ノ沢 千手観世音 塩沢山 曹源院 北村山郡大石田町橋山 327 1 ☎0237-35-2262 聖観世音 石水山 西光寺 北村山郡大石田町大石田乙 892 1 ☎0237-35-2364 聖観世音 鷹尾山 般若院 尾花沢市丹生 1699 ☎0237-22-2175 馬頭観世音 浪高山 東善院光清寺 最上郡最上町菅沢 1378 ☎0233-45-2217 十一面観世音 慈雲山 明学院 最上郡最上町菅沢 119 ☎0233-43-3916</p>	<p>Ⓚ 丹生村 聖観世音 鷹尾山 般若院 尾花沢市丹生 1699 ☎0237-22-2175 馬頭観世音 浪高山 東善院光清寺 最上郡最上町菅沢 1378 ☎0233-45-2217 十一面観世音 慈雲山 明学院 最上郡最上町菅沢 119 ☎0233-43-3916 聖観世音 庭月山 月藏院 最上郡陸川村陸月 2829 ☎0233-55-2343</p>	<p>Ⓛ 富沢 聖観世音 鷹尾山 般若院 尾花沢市丹生 1699 ☎0237-22-2175 馬頭観世音 浪高山 東善院光清寺 最上郡最上町菅沢 1378 ☎0233-45-2217 十一面観世音 慈雲山 明学院 最上郡最上町菅沢 119 ☎0233-43-3916 聖観世音 庭月山 月藏院 最上郡陸川村陸月 2829 ☎0233-55-2343 子安観世音 臥龍山 天徳寺 最上郡最上町向町 1495 ☎0233-43-3935</p>	<p>Ⓜ 太郎田 聖観世音 慈雲山 明学院 最上郡最上町菅沢 119 ☎0233-43-3916 聖観世音 庭月山 月藏院 最上郡陸川村陸月 2829 ☎0233-55-2343 子安観世音 臥龍山 天徳寺 最上郡最上町向町 1495 ☎0233-43-3935 聖観世音 臥龍山 天徳寺 最上郡最上町向町 1495 ☎0233-43-3935</p>	<p>Ⓨ 庭月 聖観世音 庭月山 月藏院 最上郡陸川村陸月 2829 ☎0233-55-2343 子安観世音 臥龍山 天徳寺 最上郡最上町向町 1495 ☎0233-43-3935 聖観世音 臥龍山 天徳寺 最上郡最上町向町 1495 ☎0233-43-3935</p>	<p>Ⓩ 世照 聖観世音 臥龍山 天徳寺 最上郡最上町向町 1495 ☎0233-43-3935</p>
--	--	--	---	--	--	---	---	--	---	--	--	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	--	--	---	---	---	--	--	---	--

図 3-7

次に「最上三十三観音」について、ホームページより拝借したのが図 3-7 のとおりです。

本尊内訳を整理すると図(表)3-8 のとおりで、前記、山形三十三観音霊場と同様に、本尊は聖観世音が殆どであるが、十一面観世音は前者の 4 倍の 8 体となっています。本尊単位の個体数も違うが、前頁図(表)3-5 と、この図 3-7 の各札所

最上の本尊	聖観世音	十一面観世音	千手観世音	馬頭観世音
個体数 計 (34)	21 (61.7%)	8 (23.5%)	4	1

図(表)3-8

本尊を照合して行くと、もちろん合致する処もあるが、違うものが多いのです。これらのことから、「山形三十三観音」は「最上三十三観音」を起源にしたようである（前記パンフ）というものの、ご本尊が 1 対 1 の対応関係にないということになります。

次にこれらの基礎資料を踏まえて、山形・最上の本場霊場と前記図 3-3 現地石仏の三者を比較検討して見ます。そこで、標記霊場現地の中で、札所番号と像容・像形が明瞭に判読出来る一番から七番



図 3-9 のものについて、菩薩名を特定化した
 と思います。まずは、代表的なもの
 について、図 3-9 のとおりの特徴を整理・把握の
 上で、それぞれの写真に名称を付定して見まし
 た。

①如意輪観世音

特に密教が盛んになる平安期以降の一面六臂像
 が多い。右膝を立て、右手は肘を右ひざに当て、
右の一手は頬にあてた思惟の姿。(左手には未開の
蓮華を持つものもある。)

②聖観世音

一面二臂の像容はいろいろな観音様の本家の
 姿。阿弥陀仏の脇士でもある。

左手に未開の蓮華を持ち、右手は手のひらを前
に向けて垂らすか、肘を曲げて蓮華に添える。水
 瓶や宝珠を持つ観音菩薩像もある。

③千手観世音

十一面四十二臂とするものが一般的である。42 本の手の内 2 本は胸前で合掌する。石仏の場合は、42 体も彫らず簡素にした本数にする。

④十一面観音

頭に十一面の仏を配する。首から下は聖観音と共通する。ただし、それぞれに願主・施主等の思い入れがあって、現場の物は変形タイプがあると言われていました。

さらに、次の4番～7番の4体については図3-10のとおりとなります。



図 3-10

以上のことを纏めると、ご本尊の比較対応の関係は、図(表)3-11のとおりとなります。

一般的に、写し霊場のご本尊は、本家本場のご本尊と一致させます。一致させるからこそ本場に行かなくても同等のご利益を受けられると信仰されている訳です。一目大きな違いに気付きます。前記図(表)3-5を見るとおり山形三十三観音の一番から七番までは、全て「聖観世音」です。図(表)3-11における比較検討からは、同現地石仏は、山形三十三観音とも、最上三十三観音とも不一致と判断出来ます。

それでは、この他のどこかの霊場と一致するのではないかという疑問が湧いて来ますが、私はここで打ち切ります。全数調査が目的ではないので、どなたか関心のある方が探究されることを期待します。ところで、図(表)3-11においては、あえて、日本語縦書きながら左から右へ行を進めるように書いて見ました。

項目	一番	二番	三番	四番	五番	六番	七番
山形三十三 (A)ご本尊	聖観世音	聖観世音	聖観世音	聖観世音	聖観世音	聖観世音	聖観世音
最上三十三 (B)ご本尊	聖観世音	千手観世音	千手観世音	聖観世音	聖観世音	十一面観世音	十一面観世音
戸神山 山西側麓 (C)現地の石仏	如意輪観世音	聖観世音	千手観世音	千手観世音	千手観世音	千手観世音	如意輪観音

図(表)3-11

【 結 論 】

本件石仏の個体に写し込む(刻み込む)ご本尊の像容・像形は、その石仏の願主や施主(寄進者)の希望で、既存の本場霊場のご本尊に捉われず、思い思いに決めたものだろうと考えています。

本場霊場のご本尊との一対一の対応関係は、横にさて置き、思い入れのある別の何かの霊場名を創造し付けたのかもしれませんが。

地元山形の名前(地名)を取って「山形三十三観音」としたものの、個別の石仏に写し込んだ観音様は、施主等の自由な希望で決めた、ということもあり得ます。

その理由の一つは、前に記述したが、「山形三十三観音」は「最上三十三観音」を起源としたというものご本尊が一対一の対応関係にないということがあります。つまり、図(表)3-11において、(A)と(B)、(B)と(C)、(A)と(C)の突合において、順番に鑑みて完全に一致している本尊がないということなのです。

したがって、**山形三十三観音**と言う人も、**最上三十三観音**と言う人も**間違った認識**を持っています。確たる証拠を提示賜れば別ですが。(エビデンスを出さずして、俺がオレがと頑張るな!と忠告します。)


ところで、「そんな面倒くさいことを言わないで、願主（持ち主、管理者）に聞けば一発で分かるではないか。」というのは人情です。そんなことの疑問・問題意識は、私も人並みに持っているつもりなので、繰り返すが、平成 26（2014）年 3 月 24 日（月）、願主の子孫であるという人（家族）に面会し、直接伺った処「分からない」というはっきりとした返事でした。

したがって、現時点において正確な事を言えば、「真実は、前記私の見立ても含めて、当たっているのか、正しいのか、間違っているのかどうかは不確定」ということになります。

[参考資料]


本件に係る瀧山史談掲載分を 3-12 に取り上げる。

瀧山史談
第17号 平成29年3月1日 (2)




戸神山 毘沙門堂南 観音霊場

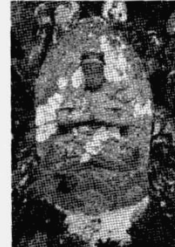
昨年五月二十五日、六月四日に行われた「戸神山観音霊場」の調査結果。




第三番




第二番




第六番




第十七番




第二十番




第十八番



第三十番



第三十一番




第三十三番

整理番号	霊場	石仏
1	第三番	千手観世音菩薩
2	第一番	如意輪観世音菩薩
3	第二番	十一面観世音菩薩
4	第五番	千手観世音菩薩
5	第七番	如意輪観世音菩薩
6	第六番	千手観世音菩薩
7	第八番	十一面観世音菩薩
8	第九番	千手観世音菩薩
9	第十一番	聖観世音菩薩
10	第十七番	聖観世音菩薩
11	第十番	聖観世音菩薩
12	第二十三番	千手観世音菩薩
13		千手観世音菩薩
14	第二十番	千手観世音菩薩
15	第十四番	如意輪観世音菩薩
16	第十八番	如意輪観世音菩薩
17		千手観世音菩薩
18	第二十四番	聖観世音菩薩
19	第二十一番	聖観世音菩薩
20		千手観世音菩薩
21	第十三番	如意輪観世音菩薩
22	第二十七番	如意輪観世音菩薩
23	第三十番	千手観世音菩薩
24	第十五番	聖観世音菩薩
25	第二十九番	馬頭観世音菩薩
26	第二十八番	聖観世音菩薩
27	第三十一番	聖観世音菩薩
28	第十九番	千手観世音菩薩
29		千手観世音菩薩
30	第四番	千手観世音菩薩
31		千手観世音菩薩
32	第三十三番	十一面観世音菩薩
33	第十六番	千手観世音菩薩

急斜面の建立されているため、雪害等で滑落した跡が多くみられた。滑落したものを持ち上げ、コンクリートで固めてある。霊場を守る気概が感じられる。

毘沙門堂からの道は危険なものとなっており、踏破には細心の注意を要する。参拝する折には十分気を付けてほしい。



山形市立滝山小学校

毘沙門堂
戸神山観音霊場

戸神山

不明	第十二番	上表の空白欄は、不明表のいずれかの番号が入るが、特定できない。
	第二十二番	
	第二十五番	
	第二十六番	
	第三十二番	

第四部

④平清水平泉寺大日堂裏手の「新四国八十八ヶ所」(写し) 霊場石仏群

1. 現地

こちらにも、「四国八十八ヶ所霊場」の写し霊場があります。場所は図4-1aの「ここ」にあります。同図1bは市道から「千歳山平泉寺」大日堂への入り口の状況で、同図の右端の標柱には「大日山 新四国八十八ヶ所霊場の地」と刻字されております。



市道から大日堂への参道を上って同堂の境内に着きます。そこで、左手に回って少し階段状の道を上って行くと、図4-2手前の宝篋印塔が目に入り、その先に並ぶように白山大権現を勧請した赤い屋根の「白山宮」のお社やしろ（図4-2）があります。なお、この大権現は当山（平泉寺）の地主神とされております。この白山宮に向かって右側に入って行くと、石碑・石塔類があつて、徐々に傾斜を増して行くがその途中に石仏（図4-3）が散りばめられるように安置されています。



石仏には、施主・願主・助施・その居住地、講中、世話人、御詠歌、梵字、願文など沢山の文字が事細かく刻されています。

最高地東屋のある所から大日堂本堂に向かって下りの道となり、境内に戻るようになっていきます。途中に、弘法大師像が図 4-4 のとおり全部で 4 体が安置されています。まさしく四国本場霊場の雰囲気を感じさせる役割を果たしています。平泉寺難波住職が調査された結果によると、弘法大師像なども含めると、同写し霊場関連の石碑・石仏・石塔が全部で 99 体安置されています。11 (99-88) 体が 88 体を盛り上げる役目を果たしております。



図 4-4

2. 石碑と本件顛末記を踏まえた造立過程

平成 28(2016)年 11 月 26 日(土)午前、平泉寺を訪れた際、丁度よく難波良淳住職が居られ、事情を説明したら、快く次の 3 点の資料提供を受け賜り、コピーすることが出来ました。

①文政十 (1827) 年七月に纏められた本件「新四国八十八か所霊場」写し霊場造立に係る古文書――四国八十八ヶ所寄附施主連名覚帳 (経緯顛末記、および寄附・寄進の施主一覧)――以下「本件顛末記」ともいう。

②同住職が整理された現地の「調査対象物分布図&一覧表」

③本場四国八十八ヶ所の霊場土を入れた小壺 (小瓶)――写真撮影 (後記)

(1) 石碑

前記図 4-2 の白山宮右側少し先に図 4-5 のとおりの石碑があります。刻字を活字化すると図 4-6 (同住職から頂いた資料) のとおりで、文政十 (1827) 年七月建立です。同碑には四国八十八所霊場造立と大乘妙典 (妙法蓮華経) 奉納の二大事業を為したことを記しています。後記本件顛末記 (図 4-7abc) と照合すると、開眼供養等諸行事に合わせて、それらの記念碑として安置したものです。

さらには中央直下に刻字した「日本廻国」の意味は何なのか? という疑問が浮かんで来たことから、別記を添付します。



図 4-5



図 4-6

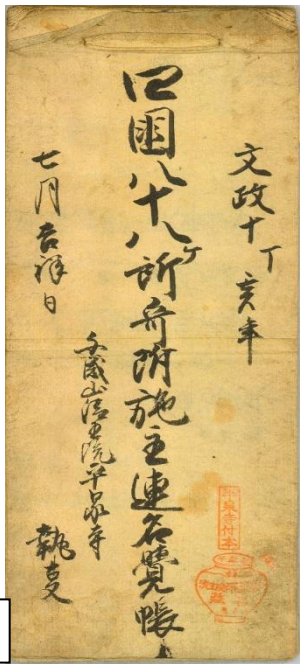
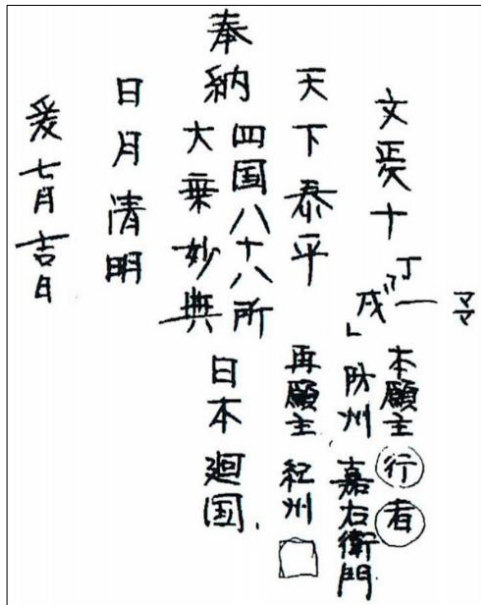


図 4-7a

「^{にちがつしょうみょう}日月清明」(仏説無量寿經の一説の一部)の意味合いについては、別記を添付します。

(2) 同写し霊場造立の歴史的経緯

図 4-7a は、本件顛末記④の表紙です。図 4-7b・4-7c は、その冒頭部 2 枚分で、大まかな経緯が記されております。本件顛末記は、当然ながら前記石碑 (図 4-5) と一体のものでしょう。

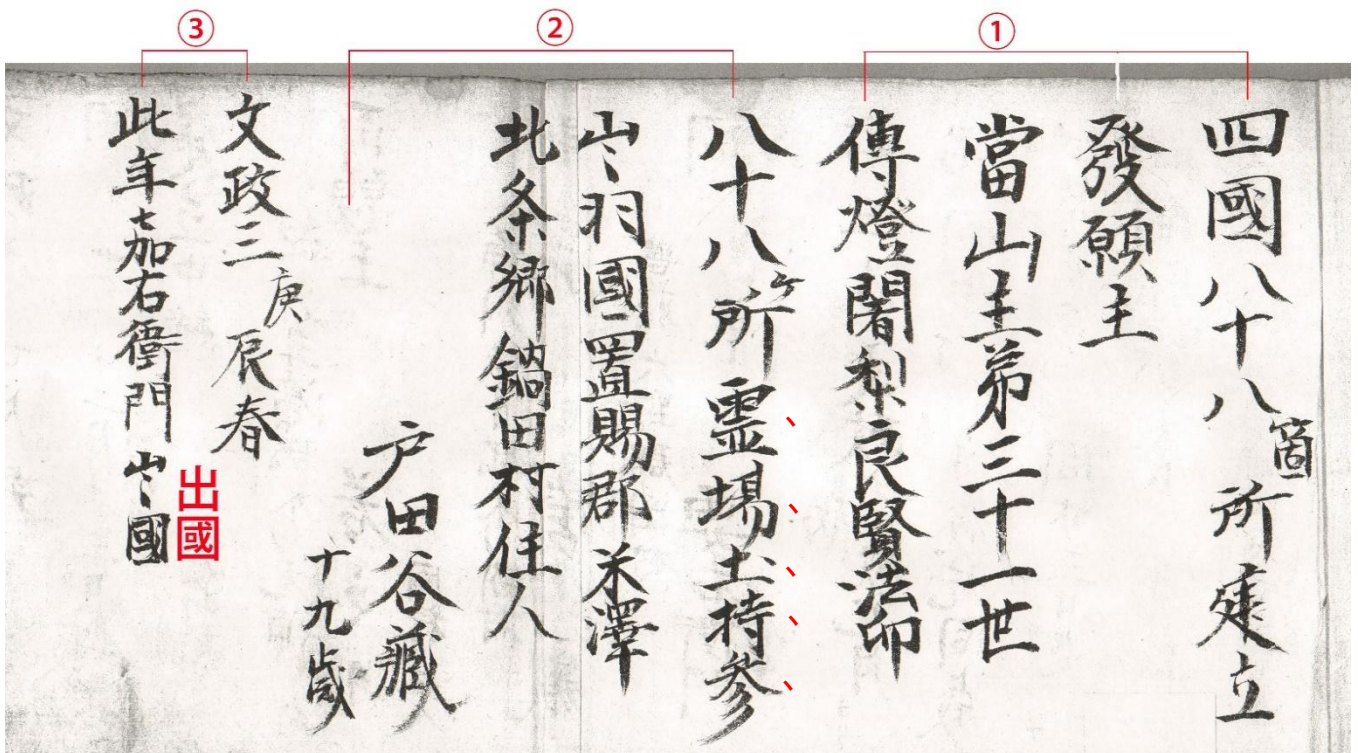


図 4-7b

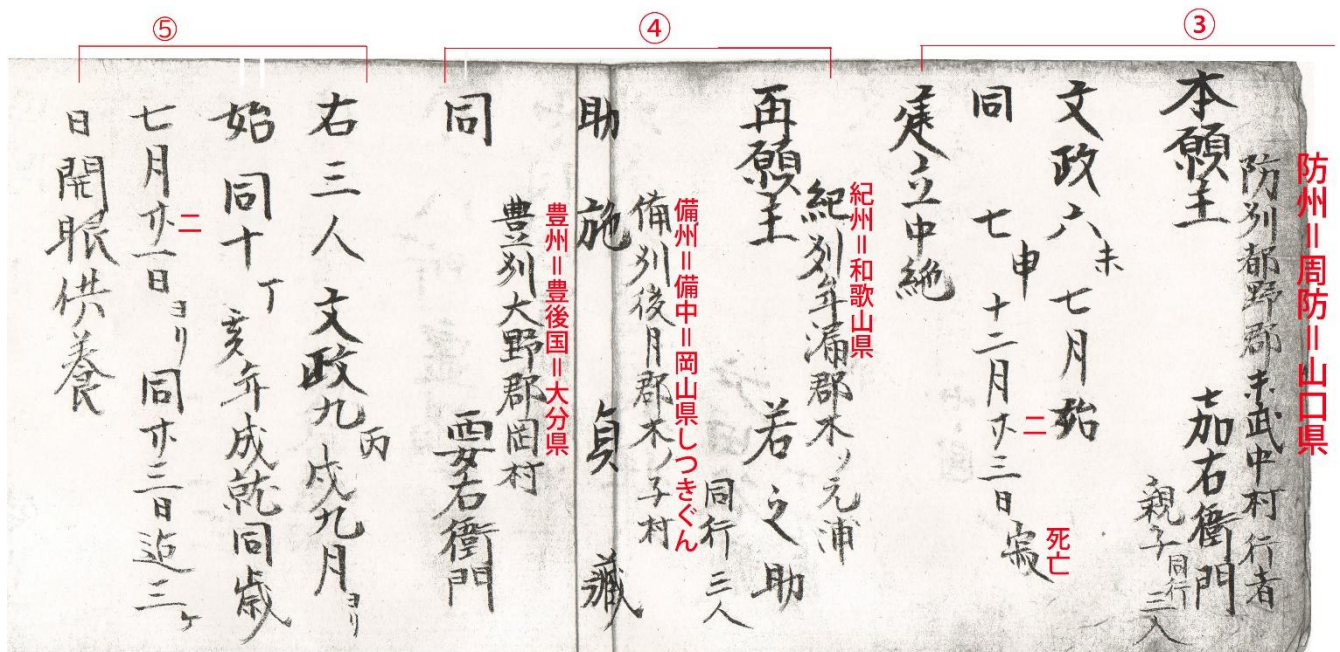


図 4-7c

その内容に係る私の意識の要点（解釈）は図(表)4-8のとおり。

段落	意 識
①	四国八十八ヶ所霊場造立の経緯を記す。発願主は当山（平泉寺）の第三十一代目「傳燈闍梨 <small>でんとうしやり</small> （=阿闍梨 <small>あじやり</small> 、自身が継承している法流を伝えることができる位）良賢」法印である。
②	本場四国八十八ヶ所霊場各本堂前からの霊土採取を指名した。その実施者は米沢藩北条郷鍋田村（現南陽市鍋田地区、赤湯駅の南部）の住人、戸田谷蔵（19歳）である。
③	文政三(1820)年春に、日本廻国行者であった防州（現山口県）都野 <small>すえたけ</small> （濃）郡末武中村の嘉右衛門は親子三人で邦を離れた。その三人はここに縁を持ち、嘉右衛門が本件の本願主となり、文政六(1823)年七月に本件造立を開始した。しかし、嘉右衛門は翌七年十二月二十三日急死した。そのために一時中断した。 （なお、平泉寺過去帳に嘉右衛門の戒名が記録されており【補完-4】に後記します。）
④	紀州（現和歌山県）の行者・若之助が本件の再願主となり、次の二人――備州（現岡山県）の貞蔵と豊州（現大分県）の要右衛門――を助施（助っ人、加勢補助役）として三人が同事業を引き継いだ。
⑤	¹ 文政九年九月に再着手、 ² 1年後の同十(1827)年に成就（完成）した。同年七月二十一日から二十三日までの3日間開眼供養祭儀を行った。

図(表)4-8

これを一つに繋ぐと以下のような一大プロジェクトのストーリーになるのではないのでしょうか。

・・・^{ろくじゅうろくぶ} 六十六部日本廻国行者であった防州の嘉右衛門は、文政三(1820)年春に親子三人共々故郷を離れ、この地(平泉寺)に入り、平泉寺三十一世良賢住職と縁を持たれた。四国八十八ヶ所霊場の本尊霊威をこの地に^{ほうせん}奉遷(移す・写す)し、本尊比定の石仏をここに安置することが話題となり、米澤の戸田谷蔵青年を巻き込み、写し霊場の設置計画について衆議一致した、まずは、戸田は本場四国を巡礼し、各札所から霊土を持ち帰ることとした。ここにおいて同住職は立案・総合企画を担う発願主(総合プロデューサー、全体統括者)の立場となった。合わせて、地元から各札所石仏の施主(金を出す人)を募る作戦を展開した。

一方、同嘉右衛門は、一時この地に住まい、同住職と連携し、石仏の彫刻を担う石工の指名など諸尊像の制作から運搬、安置に至る現場の総括責任者の立場(本願主)となり取り掛かった。

数年が経過した文政六(1823)年七月、この地に石仏の安置工事(各石仏下部には上記戸田青年が持ち帰った本尊対応の霊土を埋設)を開始した。しかし、翌年十二月に嘉右衛門は突然死去してしまった。後を引き継ぐ形で紀州・備州・豊州の3人が協力して、文政九年九月に再着手し、1年後の文政十(1827)年ついに完成に至った。そして、同年七月二十一日から二十三日までの3日間、それら所期の目的達成・所願成就を記念し、盛大な開眼供養祭を斎行した。・・・

次に本件顛末記の最後の3頁を図4-**9abc**に紹介し、簡単に意識して見ます。

・・・施主は二百二十数名に及んだ。四国八十八ヶ所諸尊、南大師遍照金剛の御大師様に、ならびに当山平泉寺の地主神白山大権現に深甚なる敬意を表し^{きえたてまつ}帰依奉る。ここに^{ほうせん}奉遷した新四国八十八ヶ所の諸尊像(石仏)には、次のような十一もの願い(図4-**9b**天下泰平～図4-**9c**滅罪生善)を込めて祀っている。

文政十年七月、本寺(平泉寺)は天台宗の出家僧(^{しゃもん}沙門)「良田」が謹んで、顛末を記録した。・・・

足掛け8年(文政三年～十年)、実質5年(文政六年～十年)を掛けて完成させたということが分かりました。各石仏の施主を確認すると、殆どは地元山形地域の人々ですが、庄内の人や、前記図4-7cに登場するような遠方(西日本)の人々も寄進に名を連ねております。私はなぜ、ここに足掛け八年を持ち出したのか。嘉右衛門は本件事業のために平泉寺に行く(来る)ことの目的を固めて邦を離れたものと推測しています、そして、途中、後に再願主となる三人と打合せを行うなど構想と移動(防州・現山口県→平清水)と、ここでの協議に要した期間が、いわば諸準備の期間が文政三年から六年までの3年余りではなかったかと想像しています。

それにしても記述(粗筋)は、全体の流れについて起承転結を以ってコンパクトに整理しており、とても分かり易く物語的によく伝わって来ます。

ところで、一つの事案顛末記において、文頭部(図4-7b)には『良賢』を記し、文末部(図4-9c)には『良田』を記しています。齟齬を感じる点があることから【補完-2】に後記することとします。

五拾六番講中
 長早村 与恩氏 佛部
 法三帝 長中帝 檀善
 四帝氏 高切 漢島
 与物 七帝 長八
 おらく 之落 友七
 巴帝善
 施主都合二百二十有余人
 南無四國八十八所諸尊
 南無大師遍照金剛
 南無當山地主百丈瓊

図 4-9 a

奉遷 諸尊像
 意趣者
 天下泰平
 國土安穩
 風雨順時
 五穀成熟
 武運長久
 萬民豊樂
 信心施主
 奉遷之四國八十八所

図 4-9 b

除災 興樂
 一山靜謐
 寺門繁榮
 滅罪生善
 祈之者也
 皆 文政十一年曆
 七月吉辰 吉辰 吉日
 天台沙門良田
 謹記
 此ことを記す

図 4-9 c

(3) 本場霊場からの採土

その1；本場四国八十八ヶ所の現地寺院より採取した霊土を入れたという壺（瓶？）1個が平泉寺に残されており、図4-10aのとおりで、側面に『六十七』――現香川県は讃岐国の67番札所大興寺――と書かれた墨字があります。

その2；さて、本件顛末記には図4-10bのとおり、桑折の瀬戸屋弥兵衛が{176(88×2)個の瓶}を寄進したという記録があります。寄進者の括りに記述しています、図4-7b記述の戸田谷蔵の行動目的とは少し違う気がします、直観です。その寄進の意味、八十八の倍の意味は何なのでしょう？

図4-10bの内容については、村山民俗学会員の市村幸夫さんから次のとおり解説を賜りました。

霊場土納 奥州伊達郡幸（桑）折中島 瓶百七十六 瀬戸屋弥兵衛 当所瀬戸屋居住ノ時

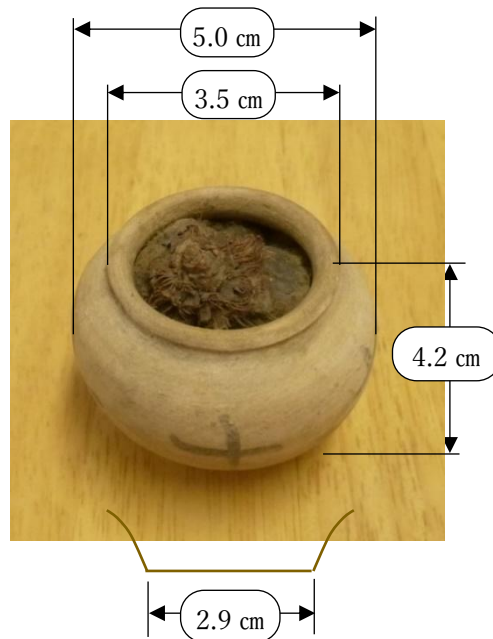


図 4-10a

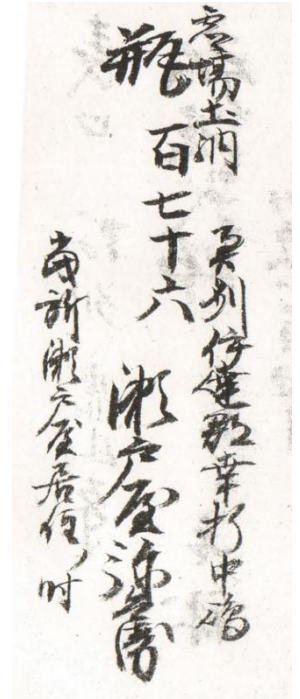


図 4-10b

その3；今に残置している図4-10a瓶（壺）と図4-10b「霊場土納」との関係からの読み解きです。

「霊場土納」の解釈ですが、市村さんは、「霊場土納」とは、瓶に88所の石か砂を入れたことを指すのか、平清水88所の石塔造成なのか、と話されています。私はその両方の意図を含み、文字をそのまま理解すれば、本場各寺院において採取した霊土（砂）を各所二つの瓶に入れ、全札所（2×88）分百七十六個を用意してここ平泉寺に納めた、ということだと思えます。よって、いずれにしても、

〔発願主の良賢和尚が戸田谷蔵青年に依頼し、受命の彼が持ち帰った採土88個分と、
施主は瀬戸屋の使者が持ち帰った採土176個分の
土が用意されたということです。なお、二つ目については瀬戸屋自身が巡礼の上で持ち帰ったということは十分にあり得ます。〕 2種類の霊

その4；さて、その使い道です！

- ・1 前記経緯からして一義的には、それらの採土をこの地の一つ一つの石仏真下に埋めたはずですが、ただ、全部を石仏の下に埋めたというのは直球的で、安直ではないのか？
- ・2 そこで、後添『関連資料』の別記《歴史&宗教 No014 写し霊場》の最終頁に記載した「お砂踏み」との関係が浮かびました。

ここらの冬期間は雪が多いのです。昔、平清水地区は平年でも1m前後の降雪があったと思います。その中であっても、本場の仏威仏光の功德を授けたい、授けたいという願望を実現するために用意したもの、つまり、冬期間対応「お砂踏み」用として、――^{いな!}否、冬期間限定のみならず、足腰が弱く石仏安置の現地に行けない人達の要望に応えるためにも準備したのではないかと想像しています。「お砂踏み」

の会場はもちろん平泉寺本堂です。お砂踏み会場を常時開いていなくても、何かの縁日の時のイベントで利用すればよいことです。「時処位」――時（時間）と処（場所）と位（立場）を弁え、「TPO」――時（time）、所（place）、場合（occasion）に応じて柔軟・適切に開場を図ったことでしょう。

以上のことから、それら土の使い方の可能性については図(表)4-11のと通りの組み合わせが考えられます。

ケース㊸のように全てを石仏下に埋めた、ケース㊹のように全てをお砂踏み用に貯蔵したことはあり得ないでしょう。したがって、ケース㊸あるいはケース㊹のいずれかの対応を行ったことでしょう。つまり、当然一部は石仏直下に埋めた、残りはお砂踏み用に保存した（していた）ということだと思っています。

――		パターン	ケース㊸		ケース㊹		ケース㊺	ケース㊻
			石仏下	砂踏用	石仏下	砂踏用	石仏下	砂踏用
戸田谷蔵の 88 か所分		A	◎	---	◎	---	◎	○
瀬戸屋 使用者の	88 か所分	B	---	○	◎	---	◎	○
	88 か所分	C	---	○	---	○	◎	○

図(表)4-11

その 5；それでは、今に残存する前記図 4-10a の瓶（壺）は、何なのかとなります。

□¹ 図 4-7b のとおり、戸田谷蔵との係りを本件顛末記文頭部に記述していることを踏まえると、現地からの採土は、積極能動的な企図、重要な使命を与えたミッションであったはずで、谷蔵の持ち帰った採土は全部石仏直下に埋めたということでしょう。

□² 後記【補完-2】図 4-18 のとおり、本件より後年代の天保三（1832）年・天保八（1837）年に発生した火災により、お砂踏み用に保存していたものも消失し、幸いにこの一つだけが残ったということではないでしょうか。

その 6；瀬戸屋が寄進したのは『瓶』（に入れたもの）とあり、今に残っている図 4-10a はその中の一つとしたものの、この形のものなのか、瓶と言えるのか、私には小壺に見えるので瓶（壺）と表記したものであります。

その 7；なお、「採土」と「石仏下に埋めた」のキーワードに関連する物語が別記「第五部」に登場します。

3. 人的ネットワークの背景

(1) そもそも、なぜ、ここに四国八十八ヶ所なのか？

前出平泉寺難波住職の話や私の想像を含めて推測してみます。弘法大師を中心における関連構図を図 4-12 のように描いて見ました。

- a. まずは、大日如来をご本尊とする真言宗の宗祖弘法大師（空海）は、全体関係構図の中心的存在を為します。
- b. 出羽の国出羽三山湯殿山は、弘法大師が開創したとする起源譚があって、各地から広く篤い信仰を集めて来ました。よって、平清水地区はカスミ場あるいは旦那場に組み込まれていた、あるいは湯殿山講中があった、あるいは出羽三山講中があったことは十分有り得ます。
- c. 平泉寺は天台宗であったとしても、ご本尊を胎藏界大日如来とする信仰の基層においては真言宗と

の併存という面があったと思います。

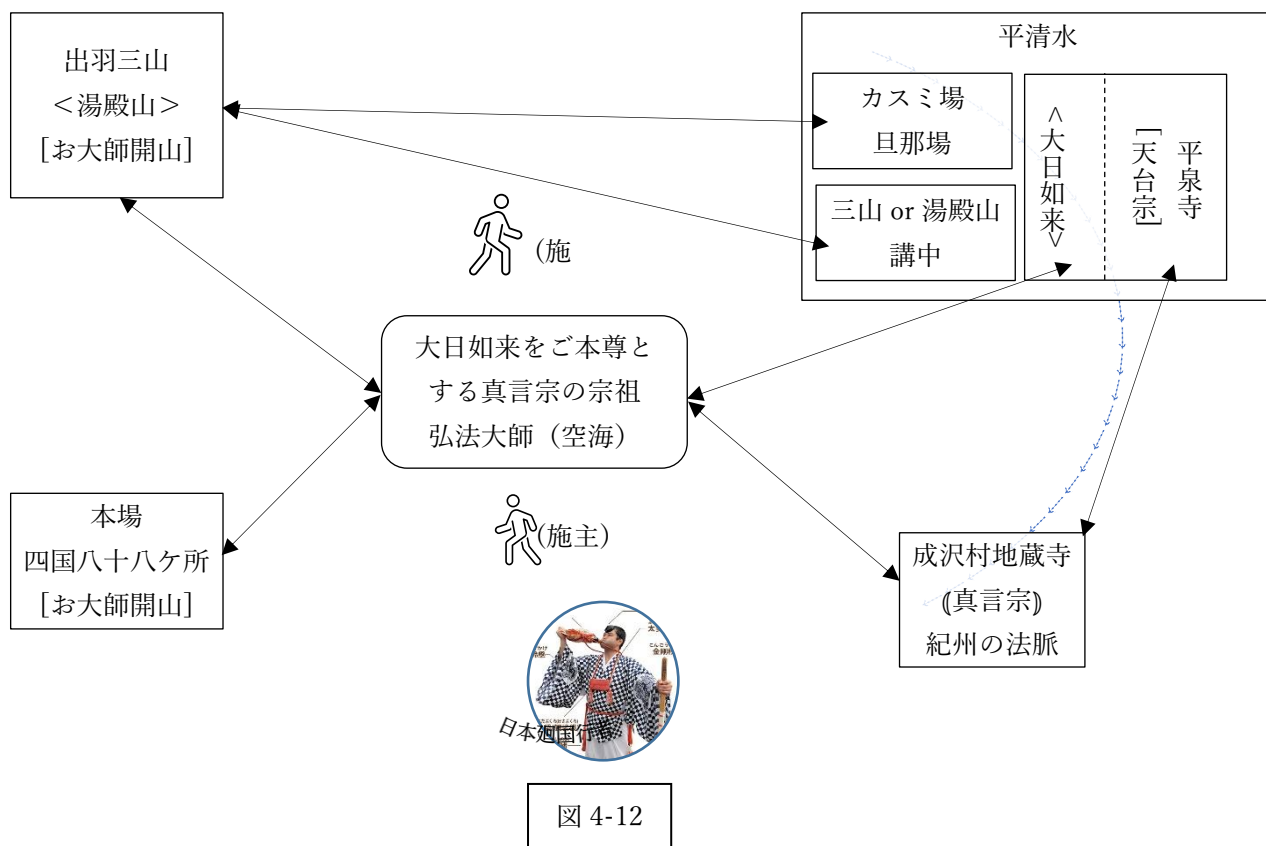


図 4-12

そもそも天台宗の本尊は、天台宗宗憲しゅうげんに「久遠実成無作の本仏をもって本体とする」とあり、一切の仏・菩薩・明王・諸天の全てが法華経の「久遠実成無作の本仏」の広現であるとし、簡単に言えば、その人が信ずる仏様はすなわちご本尊になるという教えがあります。

「大日如来=真言宗」とは限りません、その絶対等式は成立しません。大日如来を本尊として天台宗、天台宗にして本尊は大日如来、は“有り”なのです。

- d. 平安期に開山した天台宗平泉寺であるが、その三十代『昌運』和尚は今の山形市片谷地にある真言宗地蔵寺より入っており、同寺は紀州（和歌山県）雲蓋院うんがいいんの法脈（仏法を師から弟子へと伝える系脈）を継ぐ寺であったと記録されています。
- e. 本件造立当時の三十一代『良賢』和尚も同真言宗地蔵寺から入り、当該平泉寺の住職を継いでいました。したがって、当時の平泉寺は真言宗と強い縁があった、また、人脈も西日本との相応の強い繋がりがあったことが窺われます。
- f. お大師様は真言宗の宗祖であり、かつ四国八十八所霊場を開創しており、そこは格別の信仰を集め隆盛を誇っていました。

(2) 関係者のつながり構図

また、古来「西の伊勢参り」といい、東の出羽三山に詣でる事を「東の奥参り」と云われ、とりわけ、真言宗は大日如来の聖地（秘所）湯殿山は、全国的によく知れ渡り、廻国行者は必ずやここを目指したという歴史があります。そんなことから前記図 4-12 の人脈ネットワークの中で、平泉寺の和尚は四国八十八所霊場に関心を深める中で自ら探したのか、あるいは、出羽の国は山形地域内廻国行者からの紹介があったのか、いずれにしても日本廻国の仲間と係っていた嘉右衛門（防州・現山口県出身）と接点を持つ

に至ったのでしょうか、そのような状況下において、平泉寺『良賢』和尚の熱い思い・構想が実ったということではないかと思っています。

また、最初の本願主嘉右衛門の亡き後に引き継いだのは、ここ地元の人ではなく、遠く紀州の若之助、備州の貞蔵、豊州の要右衛門の三人は廻国行者であったこと――図4-7cに『同行 三人』とある――は、誠に意義深いことと感じます。一括りに西日本の人達というが、現山口県、現和歌山県、現岡山県、現大分県の人であり相応に広範囲です。明らかに廻国行者ネットワーク（仲間）の繋がりの中にあっただけでしょう。現代のような情報通信網が発達していない世の中で、これだけ多くの人達が広範囲・多層的によくぞ係ったものと感嘆するのみです。

なお、平泉寺は、変遷はあったにせよ、慈覚大師が中興した時代にあつては瀧山寺三百坊の本坊（瀧山貫主）であったこと、代々山形城主の庇護や篤い崇敬を受けて来た深い歴史があり、当時の和尚となれば学問にも精通した高僧と思われ、同和尚を尋ねたということは自然の成り行きであったのかもしれない。

それにしても、あらためて、本願主嘉右衛門は1人ではなく、子供2人を連れて、防州は山口県から遠く離れた出羽はここ山形県平清水まで来たのです、奥様を含めて総勢何人家族だったのでしょうか？ただ、おそれいるばかりです。その心意気に無性に涙が出て来ます。

4. まだ残る疑問

その1；

- ㊦ 特に嘉右衛門は平泉寺和尚とは如何なる経緯で結ばれたのか、その信仰宗派は？
- ㊧ 嘉右衛門は親子3人で来たが、子を持って来た目的は何だったのか？
- ㊨ その子供達は何歳だったのか、嘉右衛門が急死した後の再願主にならなかったことからして15歳未満だったのか、成人していても経験不足・役不足だったのか？
- ㊩ 本場霊場全札所の採土に赴いた19歳の戸田青年とは如何なる関係で選ばれたのか？
- ㊪ 同青年は良賢和尚より如何ほどの旅費・賽銭等の金銭を預けられたのか？
- ㊫ 平泉寺は行基菩薩が草創、慈覚大師が中興した天台宗の古刹であるが、どんな理由で真言宗の四国霊場の奉遷を決断したのか？
- ㊬ いずれにしても、99体ほどの石碑・石仏・石塔を安置したが、多額の資金を要したはずであり、寄進者がどんな割合で負担・拠出したのであろうか？

等々真相に迫りたいとする尽きない疑問が湧いて来ます。

その2；はたまた新たな展開があつて、前出市村幸夫さんから図4-13のとおり新たな疑問（問題提起）が出されましたことから、翌日平泉寺難波住職に直面し、これの回答に繋がるような書付けなどが無いのか尋ねた処、「――天保八（1837）年、客殿（一般的普通という本殿）が火災に遭い、寺宝相当の書類などは全て消失した。よって、本件に関しては、本件顛末記以外は何もない。なお、本件顛末記全53頁中図4-7abc・図4-9abcの6頁分以外は寄進者の氏名を羅列したもの。――」とのことでした。したがって、市村さんが深掘した考察の中において導き出した疑問に答えることが出来ずに、大変残念となった次第です。

千歳山 四国八十八ヶ所霊場

一、誰が主唱者なのか

平泉寺住職 六部行者嘉右衛門

二、勧進の主導は、平泉寺なのか六部嘉右衛門なのか

三、六部の嘉右衛門とすると、山形との接点は何か

四、勧進の明細を見るに、山形の六部の名は探せない。

山形の六部の協力なしに、勧進から石工との交渉まで可能なかどうか。

五、六部同士のネットワークの存在はあった。周防国都濃郡末武中村(現・山口県下松市)嘉右衛門と、紀伊国牟婁郡木ノ元浦(現・和歌山県カ三重県)若之助は、どのような繋がりがあったのか。

「廻国供養塔データベース」(一〇、〇五七基)に、彼らの名は無い。

六、鍋田村の戸田谷蔵(十九歳)は、何の目的で四国八十八ヶ所を廻ったのか。六部であった可能性は無いのか。平泉寺との接点は何か。

南陽市鍋田の共同墓地に「正画」奉納大乗妙典 宝曆三癸酉天七月二十一日 奉遍禮西国百五十五番供養塔 鍋田村同行四人 戸田幸吉・大武万助・鈴木九四郎・齋藤太郎介

「沖郷村史」にも「庵前二宝曆三年二建立セル奉納大証妙典卜刻セル供養塔アリ」とある。

戸田幸吉と戸田谷蔵との関係は不明なるも、この廻国供養塔の影響は無かったものか。また、資金的に同行者の存在はどうか。



七、石工について、碑文からは「里見勇助」しか探せなかった。膨大な量の石碑の作成は、強力なリーダーがなければ不可能だ。誰なのか。里見家は馬見ヶ崎に住んでいるが石工の資料は残されていない。

八、桑折の瀬戸屋弥兵衛が「瓶百七十六」納めている。何の縁なのか。山形の誰が関わっているのか。

九、山形市外の施主とは誰が交渉したのだろうか。例えば「49長崎 酒屋多蔵」は、斎藤多蔵で明治20年ころまでは長崎で酒屋を営んでいたことを確認している。

2021(R3)6/5(土)

図 4-13

5. 最後に

全貌、外観すれば、今様の言葉で言えば、発願主^①良賢和尚と本願主^②嘉右衛門の両人は、本件事業サプライチェーン構築のキーパーソンであったのです。その二人を繋いだのは^③日本廻国行者六十六部、すなわち同行者はメッセンジャー役を担ったのです。そこで浮かんだイメージは図-14のとおり横8の字楕円構造です。横8字そのものは廻国行者の果たした役割をいう。楕円の中心にある兩人に役割の上下・軽重はありません。①②③の3者に有意差はなかったのです、必要性の重みには差異がなかったのです。横8の字は無限大の記号でもあり、最高・最良・理想の四国八十八霊場ワールド成就に向けた取り組みをシンボルマーク化したものです。

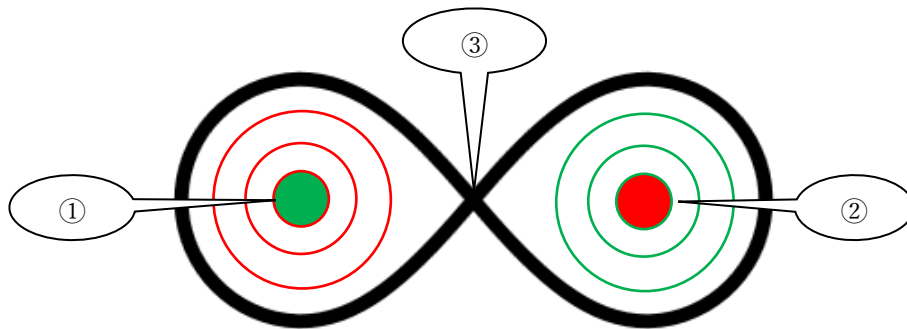


図 4-14

【 第四部に係る補完資料 】

第四部の本文を補完する意味合いの資料を貼付します。

- 【 補 完 - 1 】 本件顛末記に登場する廻国行者出身国
- 【 補 完 - 2 】 平泉寺元住職と本件との係り
- 【 補 完 - 3 】 紀州(和歌山県)雲蓄院
- 【 補 完 - 4 】 廻国行者「末武中村の嘉右衛門^エ」の戒名
- 【 補 完 - 5 】 瀧山史談掲載分
- 【 補 完 - 6 】 平泉寺難波住職から頂戴した調査票

【 補 完 - 1 】 本件顛末記に登場する廻国行者出身国

関係者の出身国は図-15aのとおりです。

日本国令制「五畿七道」図

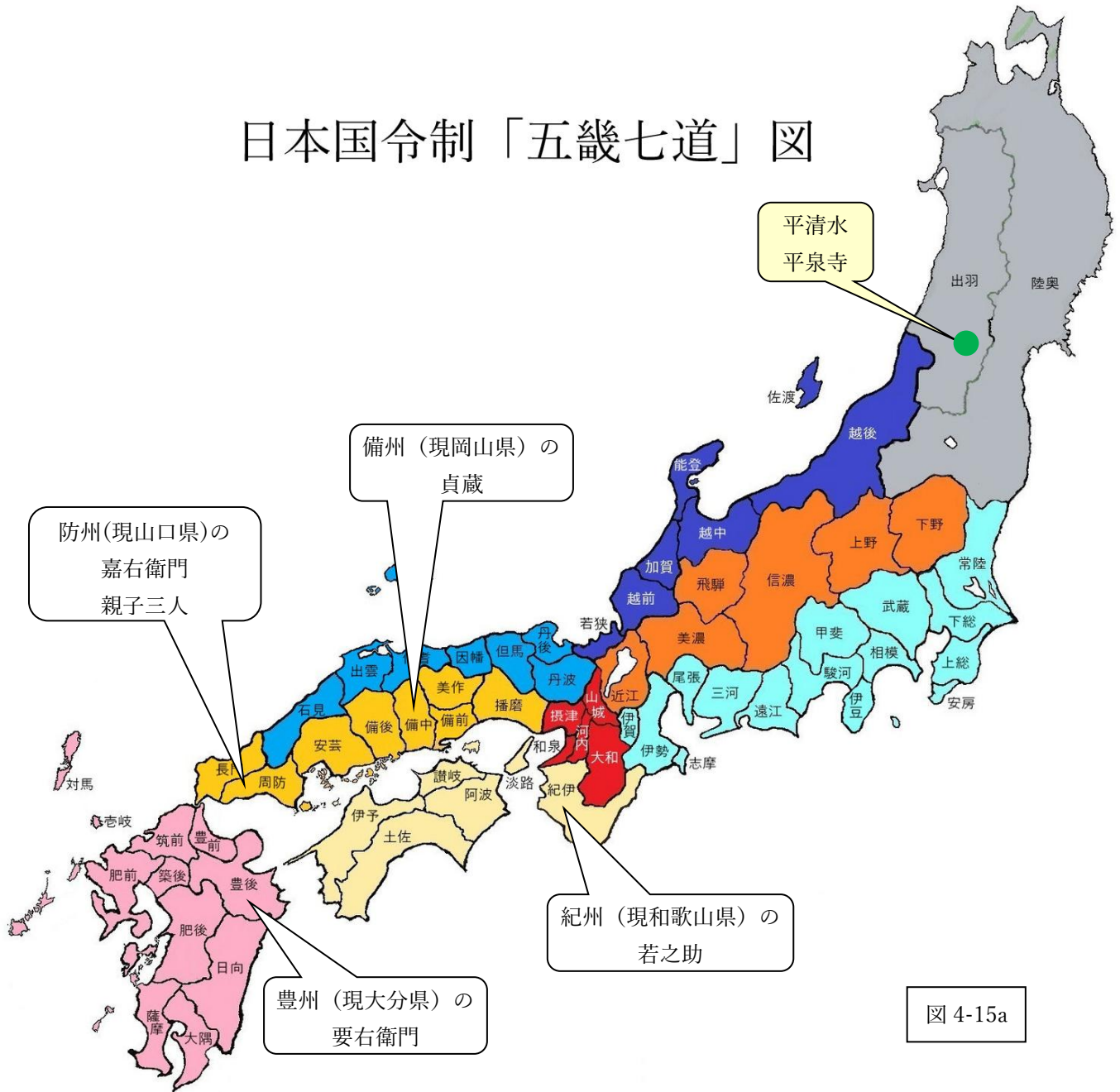


図 4-15a

図(表)-15bにおいて、各国の中心地から平泉寺までの直線距離と、1日当り35km歩くとした場合の所要日数の試算値(目安)です。日数=直線距離×1.15÷35の計算式です。

国名	豊州 (豊後)	防州 (周防)	備州 (備中)	紀州 (紀伊)
直線距離	981km	916km	696km	651km
所要日数	1,129km (32日間)	1,054km (30日間)	801km (23日間)	749km (22日間)

図(表)-15b

その1；

図 4-16 は平泉寺現難波住職からご厚意で頂戴した資料の抜粋です。本件石仏安置は三十一世『良賢』和尚の時ですが、先代三十世は隣接する成澤村地蔵寺の長子であり、「紀州(和歌山県)雲蓋院僧正昌宗之法脈也」とあります、その同じ地蔵寺の八男が『良賢』として平泉寺第三十一世を継いでいます。

【補完-1】と合わせて想像するが、この時代に西日本と相応の深い縁があったものと読み取れます。

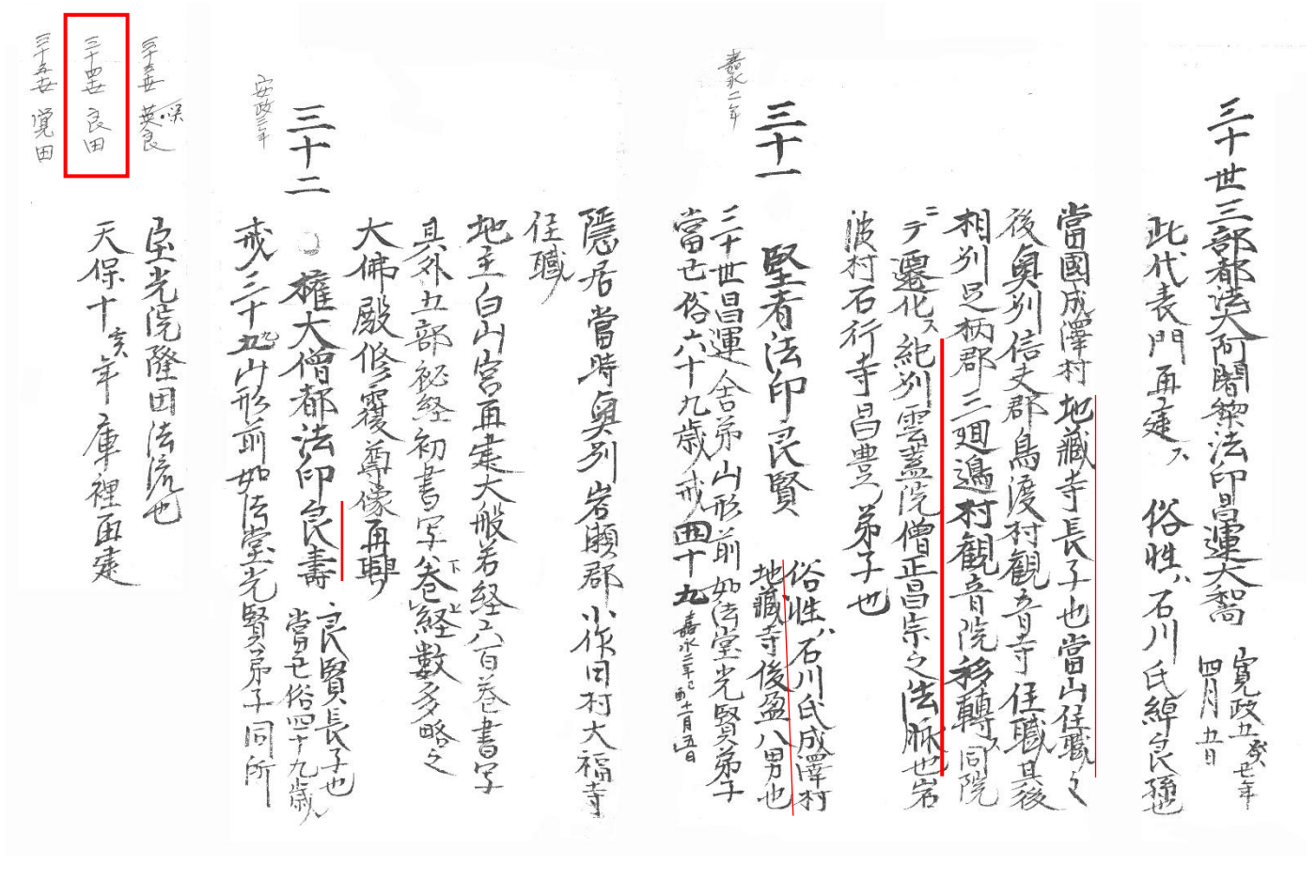


図 4-16

その2；

前記本文のとおり、文政十(1827)年の本件顛末記の作成者は『良田』(図 4-9 c のとおり、何代目なのか記述なし。)であります。図 4-16 左上には「三十四世 良田」と記述されていますが、明治前期(明治元年は 1868 年)に執事した実在の三十四代目住職です。同じ文字故に同じ人物なのか?という疑問が湧いて来ました。そこで難波住職に新たな資料提供を依頼し図-17ab を頂戴しました。

平泉寺の「由緒分限御改帳」が二冊――両方共に天保12(1841)年、表紙の文字は僅かに異なる――あり、三十二世の処を比較すると、同じ内容を記録しているが、住職の名前だけが異なっています。図4-17aにおいては『良田』、図4-17bにおいては『良壽』となっています。いずれにおいてもこの二人の係りについては記録されていないということです。また、同帳が二つある理由も不明、これらの食い違い、変遷についての正誤に係る書面は何もないということです。

また、「瀧山の歴史118頁」(『瀧山の歴史』編集委員会・滝山地区町内会連合会、平成十六年・2004年十月一日発行)は、三十二世は「良田」と明記しており、図4-17aのものに依拠したのでしょう。

なお、図4-16は「図4-17b・由緒分限御改帳」の一部でありました。

前記図4-16に記述している年号は、あくまでも没年です、いわゆる離任年ではありません、難波住職から確認しています。

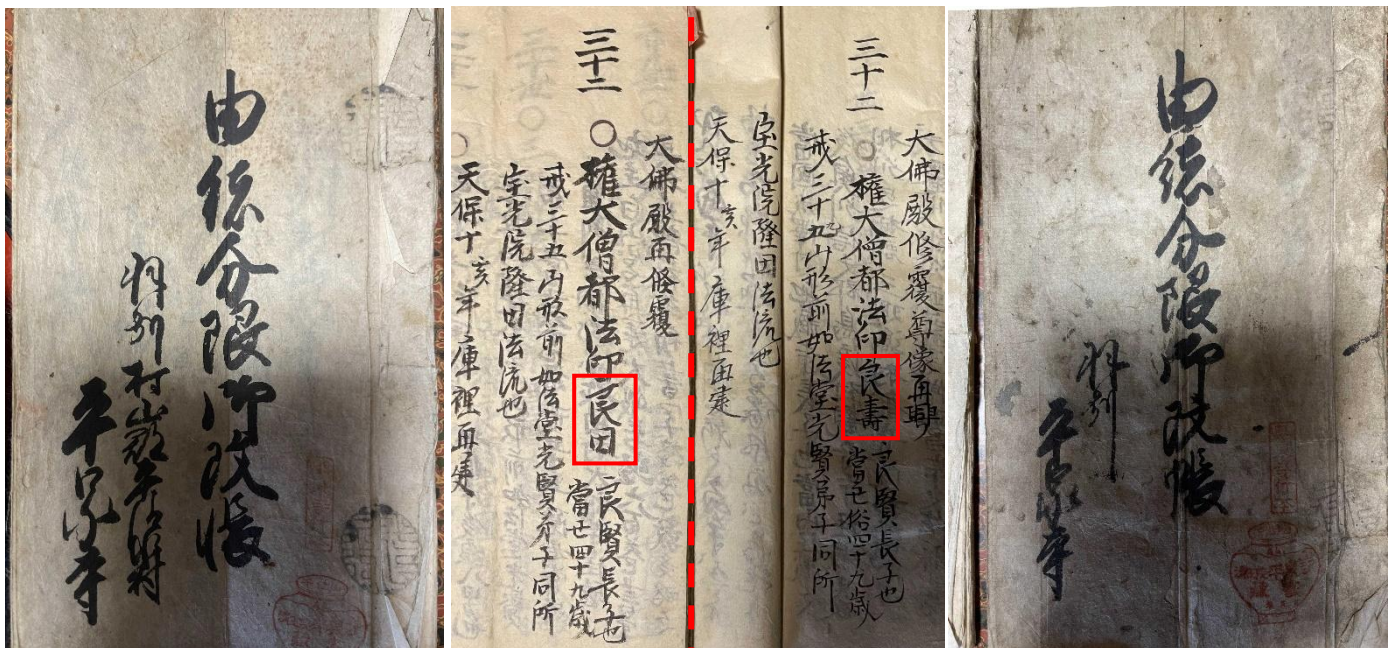


図4-17a

図4-17b

その3；

それでは「良田」とは何者なのか？ 本件顛末記(図4-7a～図4-9c)と平泉寺「由緒分限御改帳」との関連性について、平泉寺難波住職の意見(推理・推測)を踏まえて、以下に列举、後記図18のとおり整理しました。

- ✓1; 図4-9aにおいて、「南無四国八十八所諸尊」以降の文字とそれ以前では字体が異なる。
- ✓2; 天保三(1832)年に大仏堂が火災で消失、天保八(1837)年には客殿が同様に火災で消失し災難が続いた。

✓3;三十一世「良賢」は、明確な異動年次の記録はないが、それら災難の直後に福島県岩瀬郡に隠居した、あるいは、隠居の動きがあったというべきか。

✓4;そんな激動の中で、「良賢」が手掛けていた本件顛末記の書き込み

(記録の編纂)は完成に至らず――図4-9a「施主都合二百二十有余人」の文字で終わっていた。

✓5;そんなことから、「良賢」の長子(長男息子)――この時の名は「良田」であった――が、後継者として実質の住職業務を執事した。

本件顛末記と平泉寺「由緒分限御改帳」(住職歴)との関連性

三十四世	三十三世	三十二世	三十一世	三十世	正史；住職歴 (就任年不明、 没年は判明)
1891 明治二十四	1885 明治十八	1856 安政三	1849 嘉永二	1793 寛政五	
良田	英良(栄良?)	良壽(7年)	良賢(56年)		昌運
		<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> ※;真相は途中で 良田(良賢の長子)から 良壽に改名? </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 「瀧山の歴史P118」に は、三十二世は 「良田」と記載 </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> この間に 良田が 右顛末記を </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 本件の顛末記 1827 新 1823 文政十 四 文政六 霊 国 八 霊 場 八 十 場 完 十 八 着 成 八 八 工 (文 三 文 不 末 十 頭 記 部 一 部 載 良 賢 世) 賢 賢 一 部 (賢 賢 一 部) 賢 賢 一 部 文頭部と文末部の字体が違う? </div>		主要な動き

✓6;その「良田」は本件顛末記に触れる機会があり、その中で未完成であることに気付き、当該現地の石碑・石仏等を確認し、図 4-9 a「南無四国八十八所諸尊」以降の文字を追加して記録を仕上げ、自分の名を自署した。

✓7;図 4-16 において、「良田」の実質就任はこのように「良賢」の存命中なのか、それとも死後なのかは明記されていないが、時間経過からすれば「良賢」の存命中後半（終盤）に執事を開始したということかもしれない。

✓8;嘉永二(1849)年、三十一世「良賢」は死去した。

✓9;何らかの理由があって、「良田」はその名を「良壽」に変更・改名した。

✓10;したがって、図 4-18 中『!』関連、結果的には、この期間における良田と良壽は同じ人であったということです。

.....

□1 本件に関しては、本書に記述した資料以外はないということ、また、本書に記述した以外——例えば、平泉寺「由緒分限御改帳」の内容解説——は、私に関心がありません。よって後は各自の興味の赴くままに山形市史を読む等の研鑽を重ね、各自が推理・推測で想像力を膨らます他はありません。

□2; 図 4-16 中同地蔵寺の宗派についてこれには記載されていないが、令和 3(2021)年 1 月 13 日(水) 訪問し、同寺住職から直接確認して来ました。——今の所に至るまで何回か場所移動（成沢村⇒津金沢村⇒明治維新神仏分離・現在地）があった、詳細は分からないが平泉寺との縁は何かに書いてあったとの記憶はある、この地蔵寺は昔から真言宗であった。——

□3; 平泉寺の歴史全般については、「瀧山の歴史一二〇〇四（平成一六）年一〇（十）月一日 同編集委員会編纂）——」にも記載されているので、ここではこれ以上深くは触れないことにします。

図（表）4-19 のとおり、ネット「https://tempsera.at.webry.info/201411/article_11.html」で調べて見ました。

雲蓋院は、1621(元和 7)年紀州藩主・徳川頼宣よりのぶ——徳川家康の 10 男で常陸国水戸藩、駿河国駿府藩を経て紀州徳川家の祖となる——が紀伊東照宮を創建した際、山麓に別当寺として天曜寺雲蓋院を開創している。

徳川將軍、紀州徳川藩主の位牌を安置し、200 石の寺領を持つ大寺であった。

明治時代になり、神仏分離により霊屋も廃され無住のお寺となった。

その後、再興され現在の雲蓋院となっている。

- (1) 寺名：雲蓋院（うんがいいん）、(2) 住所：和歌山県和歌山市和歌浦中 3 - 5 - 9
 (3) 山号：和歌山 (4) 宗派：天台宗 (5) 開山：天海僧正 (6) 開基：徳川頼宣
 (7) 開創：1621 年 (8) 本尊：薬師如来

図（表）4-19

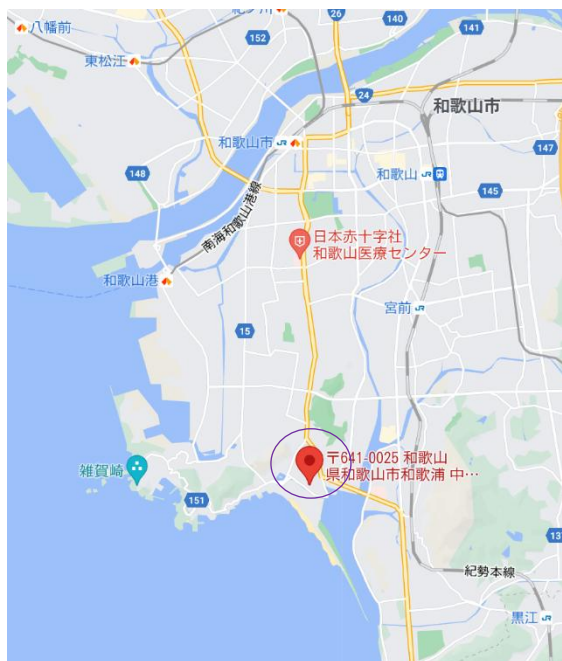


図 4-20a

場所は図 4-20a、今の本堂は図 4-20b のとおりです。徳川直系の菩提寺、すごい名門寺院なのです。



図 4-20b

㉑紀州（和歌山県）雲蓋院は天台宗、㉒成澤村地藏寺は真言宗、㉓本件平泉寺は天台宗です。㉒地藏寺について、法義を師から弟子へと順次継承する意の法脈があるというのであれば、同じ宗派繋がり——天台宗→天台宗なのかと思ったら、同地藏寺は昔から真言宗であった（4-19 頁）とのこと。しかし、仏教においては、建前は宗派と本尊を関係付けているようだが、それぞれ別々に改宗も可也、本尊も変更可也であります、当時まで遡り厳格な法脈・繋がりを探るは無意味であろう、本件に関しては、変遷経緯を潜り抜けこの三つが 1 本の線で繋がって来たということでしょう。

図 4-21 は同平泉寺難波住職から頂戴したものです。今の山口県は防州（周防国）都濃郡（=都野郡）
 末武村には末武上村、末武中^{なかそん}村、末武下村があり、その中の末武中村出身である嘉右衛門の同寺過
 去帳の写しです。この平清水（平泉寺界限）で亡くなったのです。

本件立役者の一人です、二人の子を連れて来た中、遠く邦を離れ異国のこの地で命を全うしたのです、
 戒名がとても気になります。戒名を解説して見ます。

なお、嘉右衛門の墓は平泉寺墓地（境内）にはないとのこと
 です。また、没年齢も不明です。

現代用語に漢字変換すべく『輪』の直後の文字をIMEパッド
 で検索したが出て来ません。そこで、小立の阿部慎悦さんから
 支援・尽力を賜りながら調べました。

□1；「輪」は次の二つを重ねたものと理解します。

¹ 輪は字のごとく、廻る、巡る、輪転、の意です。

² 仏教にある「輪王（^{てんりんしょうおう}転輪聖王）」の意、すなわち、正
 義を以って世界を治める理想の王の意です。

□2；輪の直後の「**鄩**」は漢和辞典にも、ネット検索
 でも見当たりません。

そこで左右に分割して見ます。

右側「**𠄎**」は「おおざと（へん）=邑=村=人が住む里」の
 意です。

左側については類似のものを探すと、「**叒**、**叒**」がありま
 す。が、「**𠄎**」の文字は見当たりません。しかし、二つの「**叒**」、
 「**叒**」にととても類似しています。このいずれもが、「**叒**」の異体
 文字です。^{おきな}叒の音読みは「そう」、意味は立派な年寄、老人の
 ことです。

したがって、「**鄩**」合体した意味を持たせ、「村里に住む誠
 実・賢明な人（翁）」と理解します。

□3；弘は「こう、ひろし、ひろむる」であります。

□4；「言+心」は^{よく}意（満ちる・満たされる）です。

以上のことから、私は、当時の住職の立場から嘉右衛門の活
 躍を思いつつ『輪 ^{りん}鄩(そう) ^{こうよく}弘意信士』と読みました。「日本全

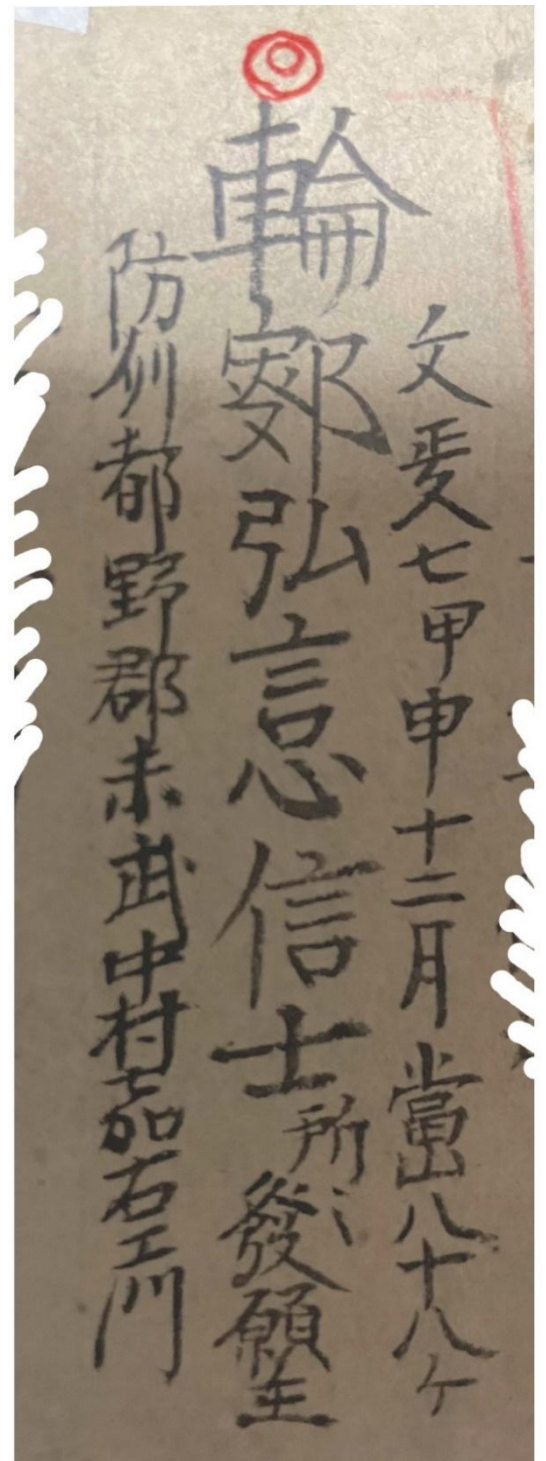


図 4-21

国（66 か国余州）の社寺を遍歴・遊行して来た男よ、異国の地、ここ出羽の国の平清水に骨を埋めることになったが、貴方様（貴殿）の志と情熱は、後世までも広く満ちて行こうぞ。」という意味を託したのでしょうか。嘉右衛門の本件のみならず生涯の業績を顕彰・供養するには誠に相応しい戒名ではないかと解釈しています。

なお、「**郟**」について、別の知人からは、「**鄭**（かさねる・ねんごろ・ていねい）」とも読めるという意見もありました。前記に重ねても、取り込んでも何ら問題はないと思っています。

本件に係る瀧山史談掲載分を 4-22 に取り上げる。

(1) 第16号 平成28年7月1日

道順	群	石仏	本体 高さ	台座 高さ	読取れた寺院	備考
1	第一群	一番 聖観音	58	15		
2	第一群	お大師(空海)像	44	15		七日町講中
3	第一群	薬師如来	53	39		
4	第二群	二番 大日如来	45	12		
5	第二群	三番 薬師如来	49.5	13		
6	第二群	四番 大日如来	49	12		
7	第二群	五番 地藏菩薩	47	15		
8	第二群	六番 薬師如来	44	12		
9	第二群	七番 阿彌陀如来	50	14		
10	第三群	八番 十一面観音	58	13.5		
11	第三群	九番 釈迦如来	51	12.8		
12	第三群	十番 千手観音	45.5	12.5		
13	第三群	十一番 ?	60.5	13.5		
14	第四群	十二番 虚空蔵菩薩	52	12		
15	第四群	十三番 大日如来	51.5	16		
16	第四群	十四番 大日如来	49	12.5		
17	第五群	十五番 阿彌陀如来	51.5	16	国分寺	
18	第五群	十六番 如意輪観音	52	14		
19	第五群	十六番 千手観音	50	12		
20	第五群	十七番 大日如来	55	10.5		
21	第五群	十八番 地藏菩薩	49	14		
22	第六群	三十七番 阿彌陀如来	53	13		
23	第六群	二十五番 地藏菩薩	51	12.5		
24	第六群	不明	48	13		
25	第七群	二十二番 ?	53.5	15.5	平等寺	
26	第七群	二十三番 ?	60.5	15		
27	第七群	二十四番 ?	50	14.5		
28	第八群	不動明王	52.5	13.5	石井田 ?	
29	第八群	十九番 ?	59			蓮華台は本体に含む
30	第九群	二十七番 聖観音	61	12.5	神楽寺 ?	
31	第九群	●六番 ?	52.5	14	石井寺 土佐	
32	第九群	不明	56.5	14.5	●野寺	
33	第十群	二十番 大日如来	53	11		台座後部埋没
34	第十群	二十九番 千手観音	59.5	15	●寺	
35	第十一群	三十二番 聖観音	60.5	12.5		
36	第十一群	三十番 阿彌陀如来	50	16		
37	第十一群	三十三番 ?	51	13		
38	第十一群	三十四番 ?	50			蓮華台は本体に 蓮華台なし
39	第十二群	●●番 地藏菩薩	52.5			
40	第十二群	文殊菩薩	50	15		
41	第十三群	卅八番	53		金剛福寺	十日町
42	第十三群	大師像	54	12.5		昭和39年建立
43	第十三群	大師像				
44	第十四群	四十番 薬師如来	67	19	観自在寺	
45	第十四群	三十七番 地藏菩薩	47.5	13	梅●寺	
46	第十四群	大日如来	49	15.5		

瀧山地区内石仏&石像調査中間報告

平泉寺大日堂の裏山に鎮座する四国八十八所霊場の調査
 四国八十八所霊場は大日堂に拝して、宝篋印塔(2頁右下参照)、地主権現白

山宮(同参照)を経て、裏山を一巡して大日堂へ降りてくる巡路に建立されている。文政年間(一八一八〜三〇)に浦和歌之助(紀州人)が、各霊場の土を瓶に

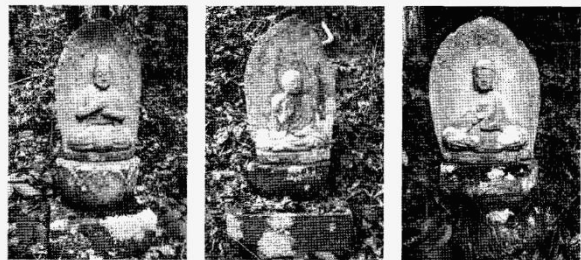
入れて埋めて石仏を建立したと言い伝えられている。経年風化の為読取れないものが多いが、寺町・下条・七日町など山形の町名が刻まれてあるものが見られる。

瀧山史談 第十六号

瀧山郷土史研究会

事務局
 〒990-2421 山形市上桜田
 瀧山コミュニティセンター内
 瀧山郷土史研究会
 ☎(023)622-13401
 FAX(023)635-10967
 印刷 中央印刷株式会社

注：写真下の番号は各表で示した巡路の番号です。



15

11

5



43

36

34

30

23

18

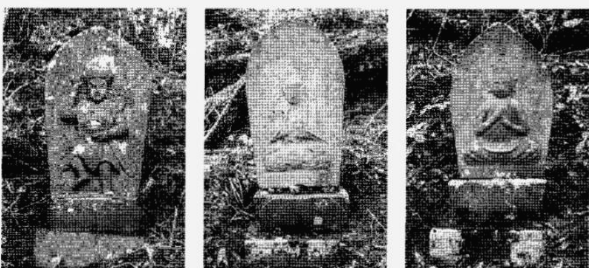
図 4-22a



5 5 5



64 62 60



74 69 66



83 80 77



93 89 85

47	十一	四十三番 ?	60	13.5		
48	五	四●番 聖観音	61.5	14		
49	群	大師像	15			
50	第	四十五番 不動明王	48	13		
51	十	四十六番 薬師如来	69	14		
52	六	四●番 阿弥陀如来	53	15		
53	群	四十八番 聖観音	63	16	西林寺	
54	第	五十一番 薬師如来	55	19		
55	十	五十番 薬師如来	56	13		
56	七	大日如来	70		線刻	
57	第	聖観音	63	11		
58	十	大日如来?	58	15		
59	八	五十四番 不動明王	55	12.5		
60	第	五十六番 地藏菩薩	55.5	34.5		
61	十	二十六番 ?	55	14		
62	群	五十七番 阿弥陀如来	58	14	八幡寺	
63	第	四十九番 薬師如来	53	14.5		
64	十	五十八番 千手観音	62	15.5	伊予	
65	群	五十九番 薬師如来	57.5	14	国分寺	
66	第	六十番 大日如来	55	15.5	横峯寺	
67	十	六十一番 大日如来	55	16	香苑寺	
68	二	聖観音	63	13.5		
69	十	六十三番 毘沙門天	60	13.5	吉祥寺	
70	群	六十四番 阿弥陀如来	72.5	21	前神寺	
71	第	聖観音	60	15		
72	十	六十六番 千手観音	54	16.5	雲邊寺	
73	群	六十七番 薬師如来	54.5	13.5		
74	第	六十四番 藏王権現	66	13		
75	二	六十八番 阿弥陀如来	58	13	八幡寺	
76	十	六十九番 聖観音	58	14	観音寺	
77	一	七十番 馬頭観音	51.5	12.5	本山寺	十日町 三輪屋兵衛
78	十	七十一番 千手観音	58	14.5	弥谷寺	
79	群	七十二番 大日如来	55.5	14	曼陀羅寺	
80	第	七十三番 釈迦如来	52.5	13.5	出釈迦寺	
81	十	七十四番 薬師如来	51	11.5	甲山寺	
82	二	七十五番 薬師如来	56	15.5	前通寺	
83	十	七十七番 薬師如来	56			蓮華台なし
84	一	七十三番 釈迦如来	48.5	15	出釈寺	
85	三	七十九番 十一面観音	51	14.5		
86	群	七十八番 阿弥陀如来	55	15	道●寺	
87	第	八十番 千手観音	61.5	14	国分寺	
88	一	八十一番 千手観音	52	14	白峯寺	
89	十	八十二番 千手観音	61.5	13	根香寺	
90	四	八十四番 千手観音	53	14	八●寺	
91	第	八十七番 聖観音	61.5	14	長尾寺	
92	十	八十六番 聖観音	66	13.5	志度寺	
93	第	八十五番 藏王大権現	60		●寺奥院	線刻
94	一	八十六番 ? 聖観音	61	13		寺町
95	十	八十七番 聖観音	61	16.5		
96	群	八十八番 薬師如来	50	15	大窪寺	
97	第	お大師(空海)像	47	14		

*宝篋印塔
 享保四年(一七
 一九)建立。昭和
 五四年修理の為に
 解体した時に仏舎
 利が納められてい
 ることが判った。
 *地主権現白山宮
 元慶年間(八七
 七~八五)天台宗
 名僧平泉寺一世大
 僧都良昶和尚が大
 日山頂上に建立。
 現在のお堂は、寛
 政七年(一七九
 五)三十一世良賢
 和尚が再建してい
 る。

図 4-22b

本件に係り平泉寺難波住職から頂戴した調査票を 4-23 に取り上げる。

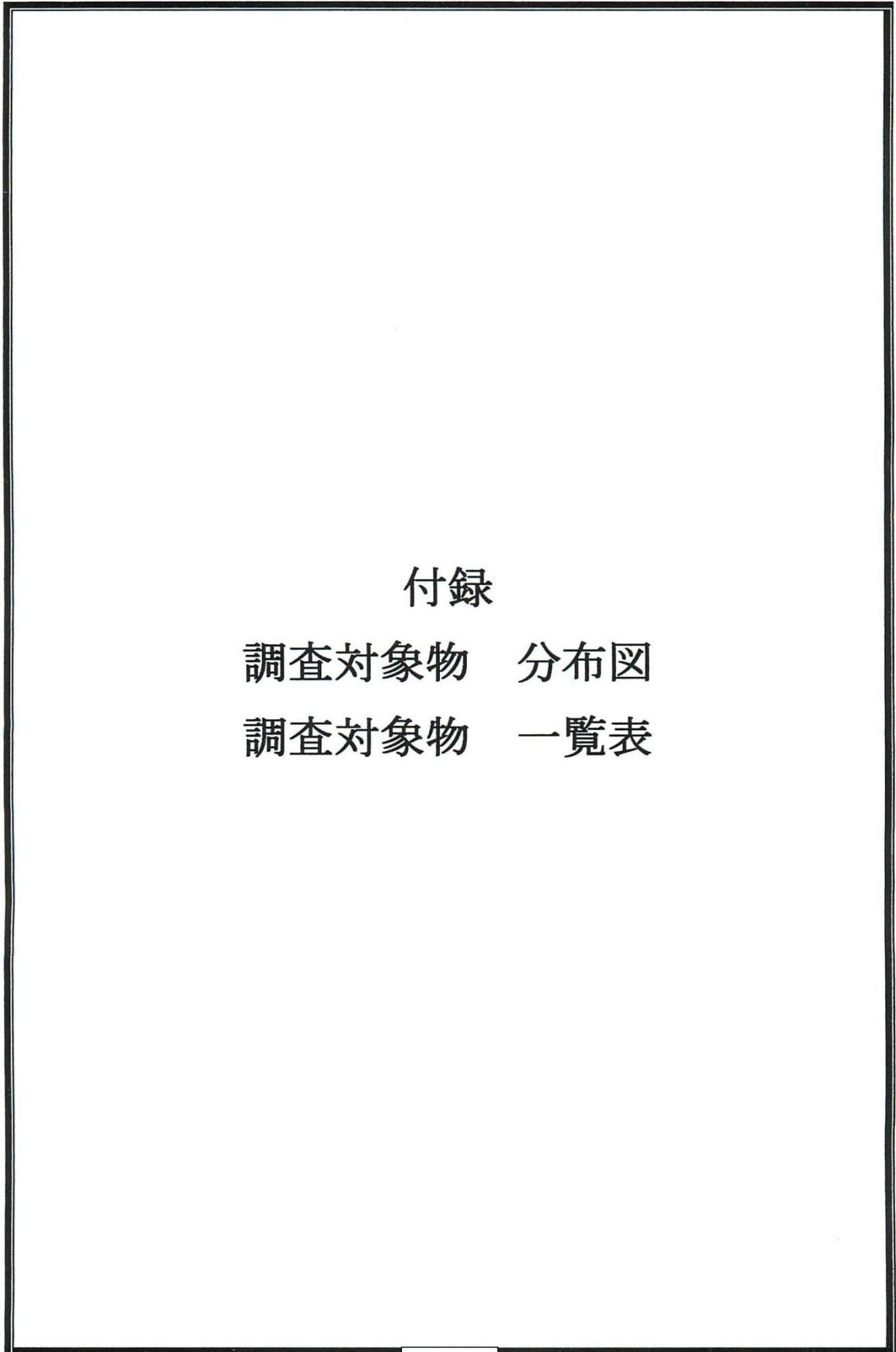
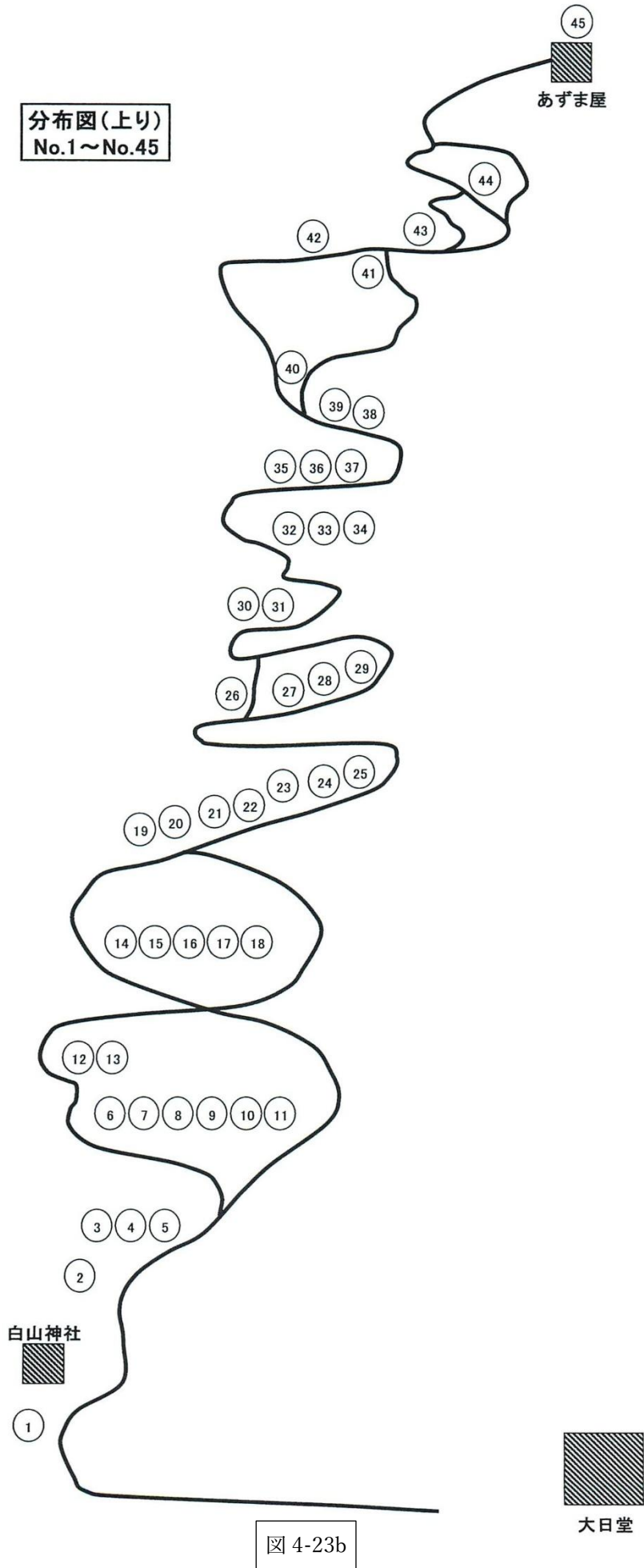


図 4-23a

分布図(上り)
No.1~No.45



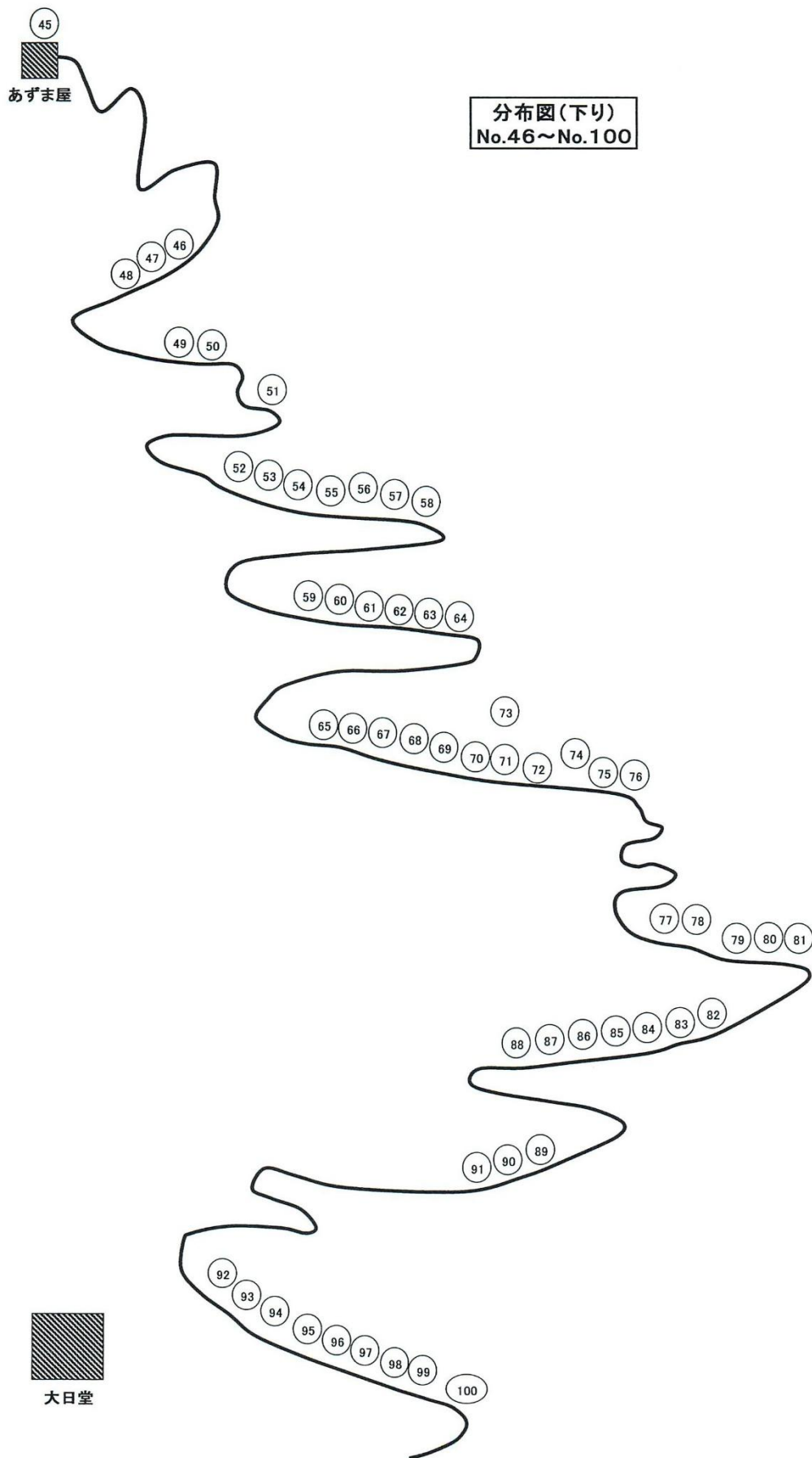


図 4-23c

調査対象物 一覧表

資料番号	名称	対応札所	施主	世話人
1	宝篋印塔		海應	
2	石碑		行者 防州 嘉右衛門 紀州	
3	十一面観音菩薩坐像	11藤井寺	同 同かめ	□州□助 □中 嘉右衛門
4	弘法大師坐像		施主:山形七日町講中 発願主:千歳山平泉寺 現住 良賢 助施:防州□□郡□□村 行者 嘉右衛門 同行三人	当村 治三郎
5	釈迦如来坐像	1霊山寺	小林俊治	
6	阿弥陀如来坐像	7十楽寺	十日町 三□□	
7	薬師如来坐像	6安楽寺	日参講中	
8	地藏菩薩坐像	5地藏寺	光明寺念仏講中 亥之助	
9	大日如来坐像	4大日寺	桧物町 □□□	
10	釈迦如来坐像	3金泉寺	材木町 日参行者 油屋源蔵	
11	阿弥陀如来坐像	2極楽寺	七日町 米屋半助	
12	釈迦如来坐像	9法輪寺	桧物町 念仏講中	伊兵衛
13	千手観音菩薩立像	8熊谷寺	不明	
14	千手観音菩薩坐像	10切幡寺	七日町 富士屋安兵衛	
15	十一面観音菩薩立像	11藤井寺	岩波村 伊藤藤十郎	
16	虚空蔵菩薩坐像	12焼山寺	清水半兵衛	
17	大日如来坐像	13大日寺	内表村講中	
18	弥勒菩薩坐像	14常楽寺	さか江 □□母	
19	薬師如来坐像	15国分寺	円應寺町	
20	如意輪観音菩薩坐像	一不明	不明	
21	千手観音菩薩坐像	16観音寺	材木町 油屋 およね □い□ □と□	
22	薬師如来坐像	17井戸寺	かぢ町講中	
23	地藏菩薩坐像	20鶴林寺	不明	
24	十一面観音菩薩坐像	37岩本寺	弓町	
25	地藏菩薩坐像	25津照寺	□□町念仏講中	
26	虚空蔵菩薩坐像	21太龍寺	□町 勘蔵	
27	薬師如来坐像	22平等寺	下条町 下組	長八 五四郎 智室理玉
28	薬師如来坐像	23薬王寺	□□村 青山□□	
29	虚空蔵菩薩坐像	24最御崎寺	□屋町 藤善三郎 彦吉	
30	不動明王坐像	36青龍寺	寺町 大□□□□□	
31	薬師如来坐像	29不明	宮町下組 念仏講中	
32	十一面観音菩薩立像	27神峯寺	削り落とした痕跡があるため、不明	此道 日参行者
33	薬師如来坐像	26金剛頂寺	風間村講中	新助 文吉 善太郎
34	薬師如来坐像	18恩山寺	妙見寺村 鈴木大治郎 仙台□三	下野国塩屋郡行者善右衛門 同まつ
35	大日如来坐像	28大日寺	弓町 兵六	
36	十一面観音菩薩立像	29国分寺	□□屋源之助 同□八 同□八	
37	十一面観音菩薩立像	32禅師峰寺	武田小三郎 同志け 同□□□ 同娘	
38	薬師如来坐像	33雪隠寺	五日町 青山氏	日参行者
39	阿弥陀如来坐像	30善楽寺	十日町 □□かつ	
40	薬師如来坐像	35清瀧寺	小橋町 千代松	
41	薬師如来坐像	34種間寺	五日町 三條屋藤兵衛	
42	地藏菩薩坐像	19立江寺	十日町 大坂屋□□□	
43	文殊菩薩坐像	31竹林寺	寒河江石川 安達市兵衛	
44	十一面観音菩薩坐像	38金剛福寺	十日町 江戸屋内 里免	
45	弘法大師坐像		(台座)村山郡□□村 高橋藤九 (本体)近藤サクエ 平尾みね 鈴木ナミ	
46	薬師如来坐像	40観自在寺	若州大飯郡 穂積村 行者喜助	長町村中組 清七 庄兵衛 (他二名か)
47	地藏菩薩坐像	41龍光寺	大畑八十右工門 福島屋□□□	
48	大日如来坐像	42仏木寺	城口屋□□□□	十日町宿 ~
49	十一面観音菩薩坐像	43明石寺	八日町 有川屋□兵衛	□□□

図 4-23d

資料番号	名称	対応札所	施主	世話人
50	聖観音菩薩立像	44大宝寺	大寺村 ~	
51	弘法大師坐像		八日町 佐藤屋清吉 木村玄栄 志戸田村 秋葉清口	鉄砲町 丈助 市口 平吉
52	不動明王坐像	45岩屋寺	七日町 染屋又右衛門	
53	薬師如来立像	46浄瑠璃寺	円應寺町 勤兵衛	伊之助
54	阿弥陀如来坐像	47八坂寺		
55	十一面観音菩薩坐像	48西林寺	諏訪町念仏講中	日参行者
56	薬師如来坐像	51石手寺	銅町念仏講中	
57	薬師如来立像	50繁多寺	肴町 徳右工門 寅吉 勘七 施主:三條五郎兵衛 願主:防州都野郡口武中村 行者嘉右衛門 記州牟漏郡右同断 若之助 備州後月郡右同断 貞蔵	
58	石碑	51石手寺		
59	十一面観音菩薩立像	52太山寺	口口屋丈助	
60	阿弥陀如来立像	53円明寺	八日町 ~	
61	不動明王坐像	54延命寺	やくし町 横倉仁口	
62	地藏菩薩坐像	56泰山寺		
63	如来形坐像	55南光坊	千代松 口口口 口せ	
64	阿弥陀如来立像	57栄福寺	片町 念仏講中	
65	釈迦如来坐像	49浄土寺		
66	千手観音菩薩立像	58仙遊寺	落合村 沖原村 念仏講中	小三郎 忠吉
67	薬師如来坐像	59国分寺	宮町	口口 口口
68	大日如来坐像	60横峰寺	十日町 和久井助右衛門	
69	大日如来坐像	61香園寺	十日町 丹野清右工門 片町 染屋又右工門	日参行者
70	十一面観音菩薩立像	62宝寿寺	畑谷林治郎	
71	毘沙門天坐像	63吉祥寺	八日町 有川や 弥蔵	
72	阿弥陀如来立像	64前神寺	長町村 惣右工門	若狭国大飯郡 横積村 行者 喜助 沖原中 善六
73	蔵王権現立像	64前神寺奥院		
74	十一面観音菩薩立像	65三角寺	肴町 藤野唯吉 船山口口口門	
75	十一面観音菩薩立像	66雲辺寺	旅籠町 柵屋利兵衛	日参行者
76	薬師如来坐像	67大興寺	不明	
77	阿弥陀如来坐像	68神恵院	落合村 権平	
78	聖観音菩薩立像	69観音寺	下条町 神保真右工門	日参行者
79	馬頭観音菩薩坐像	70本山寺	十日町 三輪屋治兵衛	日参行者
80	十一面観音菩薩立像	71弥谷寺	蠟燭町 奥山四良治 倅 久七	
81	大日如来坐像	72曼荼羅寺	山辺かち町 弥五郎	
82	釈迦如来坐像	73出釈迦寺	小姓町 治兵衛 山辺かち町 勤兵衛	
83	薬師如来坐像	74甲山寺	歩町 勘蔵	
84	薬師如来坐像	75善通寺	羽州庄内口口口 阿州口口口	
85	薬師如来坐像	76金倉寺	小白川村 丈三郎 圓應寺 口口口	
86	釈迦如来坐像	73出釈迦寺	大坂屋 お口口 お口口	
87	十一面観音菩薩立像	79天皇寺		
88	阿弥陀如来坐像	78郷照寺	下条町口口口	
89	十一面観音菩薩立像	80国分寺	下条町 長崎十右工門	日参行者
90	十一面観音菩薩立像	81白峯寺	はたご町 西山嘉兵衛	
91	十一面観音菩薩立像	82根香寺		
92	十一面観音菩薩立像	84屋島寺	上東山村中	弥口 金助 俊口
93	聖観音菩薩立像	87長尾寺	岩波村 観音山石行寺 伊藤忠助	
94	十一面観音菩薩立像	86志度寺	七日町下組 念仏講中	
95	石碑	85八栗寺奥院	前田村 七三郎	
96	聖観音菩薩立像	83一宮寺	下条町 作兵衛 口沼作右衛門 神保口口口 番所町 お口口	
97	聖観音菩薩立像	85八栗寺	圓應寺上中 念仏講中 本願主:記州牟漏郡木ノ元村 若之助 助施:備州後月郡木ノ子村 貞蔵 豊州大口郡同断 善右衛門	
98	薬師如来坐像	88大窪寺		
99	弘法大師坐像	88大窪寺奥院	大坂屋治右衛門	

図 4-23e

(end)

第 五 部

⑤平清水耕龍寺裏手、平清水観音堂脇の
「^{さいごく}西国三十三観音、坂東・秩父・最上の都合百観音を合体」 (写し)
霊場石仏群

1. 標記題目合体霊場の石碑・石仏

その場所は、図 5-1 のとおりの平清水秋葉山南下エリアにあります。



図 5-1

対象の石碑は同図において「最上三十三観音第6番札所平清水観音堂」の100m程西側、⑦の所にあり、状況は図 5-2 のとおりです。

2. 同石碑の刻字解析

まずは、この石碑の裏側（北面）には図 5-3 のとおりの「天保十四 ^{みずのとう} 癸 ^{くよう} 卯四月供粮之日」（1843年）の建立年月が刻字されています。図 5-4 a 同碑正面の刻字を右側から読むと、同図 4 b のとおり「坂東秩父最上都合百番札所」「西國三十三所霊土拝請安置」「讚州象頭山諸国佛閣神社」と縦書き3行に亘って刻字されています。

その刻字（碑文）から次のような事が読み取れます。



図 5-2

天保十四癸卯年四月供養之日



図 5-3

その1；この石碑は、中央部①西国（三十三所観音霊場）に加えて、さらに右側の②坂東（三十三所観音霊場）・③秩父（三十四所観音霊場）・④最上（三十三所観音霊場）の小計百観音に、また、「讃州象頭山」の刻字からは、讃岐国（=讃州=現香川県）の⑤金毘羅大権現参拝も加え、これら総計五霊場 134（①33+②33+③34+④33+⑤1）札所の神威・仏光を内包していることとなります。あるいは「五霊場を合祀した奉遷（^{ほうせん}移す・写す）霊場」とも言えるものです。いわば、五つの顔を持っているという訳であります。

その2；縦2行目後半の「^{はいしょう}霊土拝請安置」——「^{うやうや}拝請

とは、「^{うやうや}礼拝懇請」の略で、師家や長上の僧を恭しく丁重に迎えること、恭しくは貫って来ること。——の文字の配置から察するに、西国三十三観音霊場全札所の現地から、（あるいは134霊場の全てからなのか？）霊土を頂戴（境内の土を採取）して来て——背負える範囲の量で

（あるいは134霊場の全てからなのか？）霊土を頂戴（境内の土を採取）して来て——背負える範囲の量で

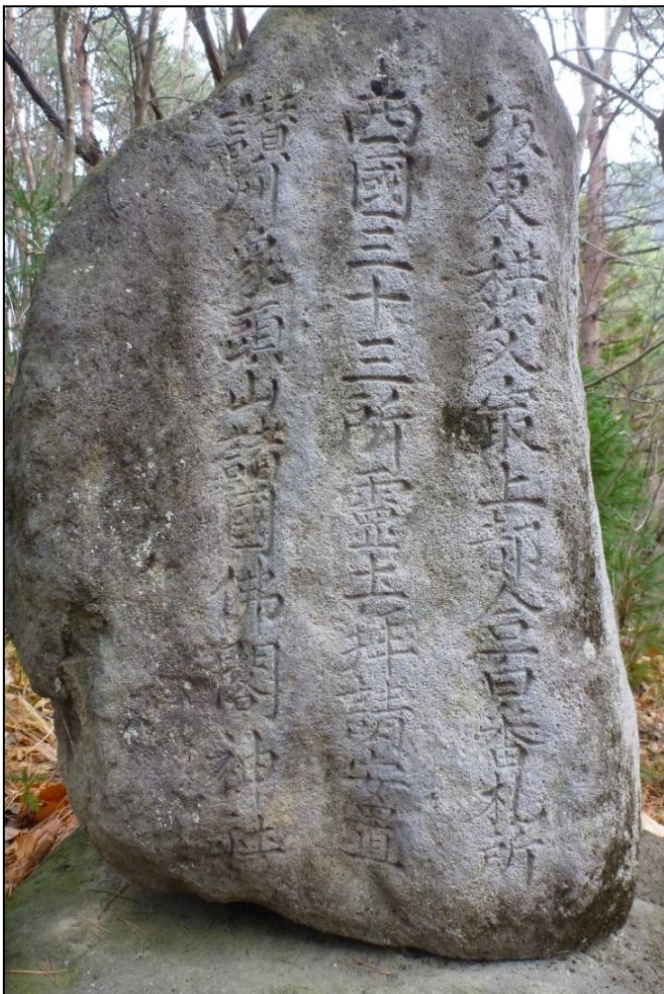


図 5-4 a

〔左石碑の刻字〕

坂東秩父最上都合百番札所
西国三十三所霊土拝請安置
讃州象頭山諸国佛閣神社

図 5-4 b

しょうが、一人分は僅かでも、例えば数人の助力・下男を伴えば相応の量——この地に石仏（後記図5-7）を安置するために地面を掘削した際、持ち帰った霊土を埋めてその上にそれぞれの石仏を安置したと

いうことを物語ります。なお、後記5-6頁のとおり、当時の石仏はこの石碑周辺にバラバラに安置されておりました。

ここで関連を記述しておきます。「第四部 ④平清水平泉寺大日堂裏手の『新四国八十八ヶ所』（写し）霊場石仏群」に記載したが、本場の「四国八十八ヶ所霊場土」を持ち帰って、こちらの石仏直下に埋めたという事例からして、ここに奉遷した西国三十三所霊場においても、全ての現地から霊土を持ち帰ったことであろうから、その労苦と深い信仰心にとっても感動します。

その3；縦3行目には、「佛閣神社」とあるとおり、「^{かみ=しん}神・^{ほとけ=ぶつ}仏」を並列・同列し、神仏習合の御心^{みこころ}に対する崇敬を、崇仏敬神をきちんと表示しているものが現存していることは、誠にうれしく感じています。

なお、元々は、讚州象頭山は金比羅山・金毘羅山・琴平山とも言われ、神仏習合権現信仰の象徴でもありました。吾がこの地に金比羅信仰を広めるに至った証でもあると理解出来ます。また、今にいう金刀比羅宮信仰に繋がるものです。

その4；同碑に向かって右側(東面)には、図5-5のとおり「奉巡拝 天下泰平 国家安穩」の文字、左側に「為 現當二世大安樂 子孫永盛繁榮^{?1 ?2?3}祈」、中央下部に「願主 當村 □助妻□□」と刻字があります。このことについては、「山形県の金毘羅信仰（野口一雄著／原人舎）」の本――江戸期、金毘羅信仰は民衆にも浸透していた証左として、参詣長旅の道中記が紹介されている。――にも記載されており、その書には、?1の処は「善」と書かれています。しかし、?2・

?3部分は不明とし記述はありません。

いずれにしても現物の?1～?3個所は、崩し字の上に風化・磨滅もあって当初は読み難いものがありました。

3. ?2・?3の推理解読

前出野口一雄著「山形県の金毘羅信仰」P203には?1の処は「善」と書かれているものの、現物は風化著しく読み難く苦心していました。しかし凝視する中で解明する事が出来ました。

それは、図5-6のとおり「?1=善」であります。その崩し文字と楷書文字を比較して行くと一致する事が分かりました、善助の善です。

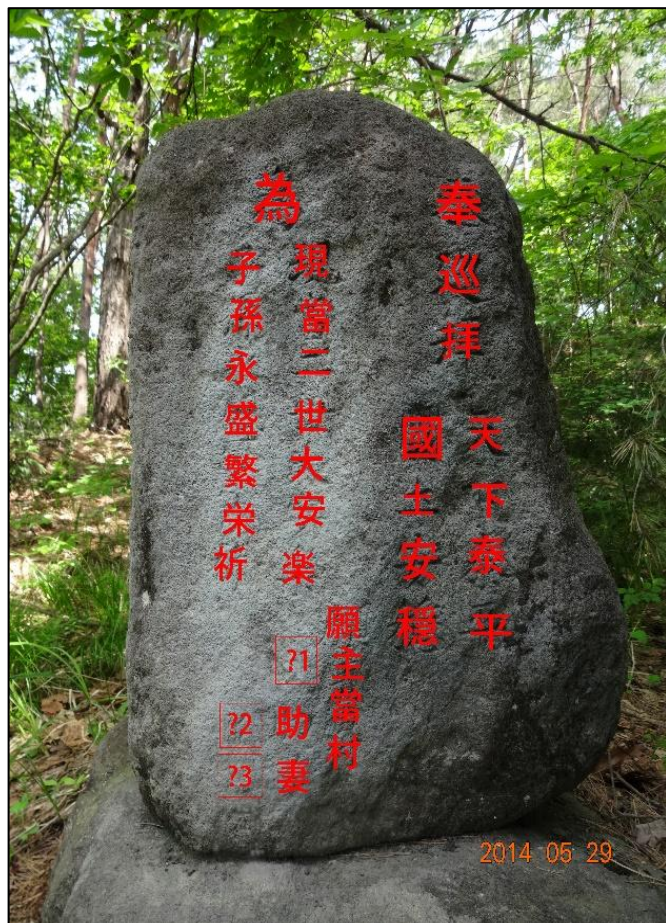


図5-5

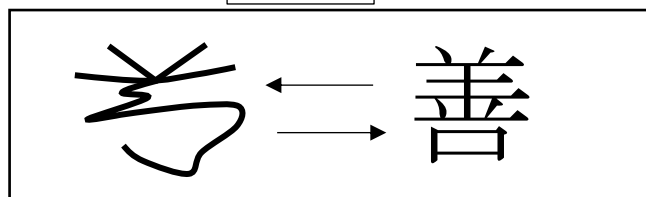


図5-6

次の問題は、前記図 5-5 石碑の左最下部の ? 2 ? 3 の処の文字であります。この 2 文字は、繰り返すが、同書籍には記載されていません。当初は解読出来なかったが、凝視する中で次のように解読出来ました。《歴史&宗教 No011》に別記したとお

り、善助の妻の名は南竜山の開祖『おゆき』であったとあり、このことが予備知識となって（頭の隅にあった）次に進む事が出来ました。

それは、図 5-7 のとおりであります。その崩し文字と楷書文字を比較して行くと一致する事が分かりました。「? 2 = お」「? 3 = 之(ゆき)」だったのです。

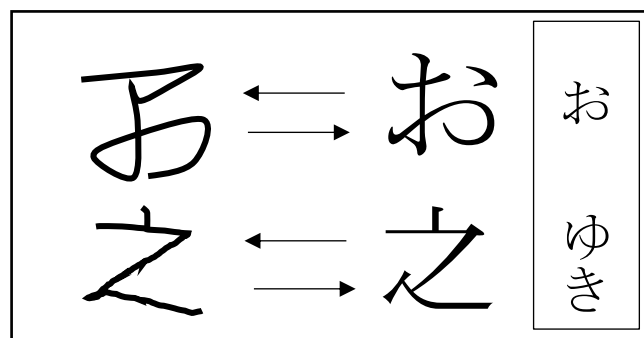


図 5-7

結局は前記図 5-3a の 五霊場巡拝記念碑の願主は「善助の妻おゆき」であると読み切ったのでありま

す。しかし、この人の集落名は刻字されていません。ただ「當村」とあるので、当村と言えば「平清水」であると理解するのが普通であろう。この石碑の願主たる「善助の妻おゆき」は、まさに「・・・（八森から）平清水村の農夫善助の嫁となった。・・・」その人であったのです。

4. 石に刻した内容読み解きの全体像

その 1； 私独自の解釈です。平清水の南竜山開祖「おゆき（=妙現尼）」が願主となり、以下の思いを込め建立した。俗世の我欲・私心を離れ、大所高所から地元のみならず国の天下泰平・国土安穩を願い、西国と坂東・秩父・最上の観音霊場と金毘羅を合わせて五霊場を巡拝する事を企図した。結果して、自らが所期目的のと通りの五霊場仏閣神社巡拝を成就し、無事、故郷はここ平清水に戻る事が出来た。これを記念すると共に、今の私達（みんな）の現在世と当（當）来世——現在とあの世（未来）——の二世の大いなる安樂である事、幸福の招来と御利益^{りやく}を祈願する事、さらには、皆の子孫の永盛繁榮・五穀豊穰を祈念する事を合わせて、ここに本石碑を建立し、この周辺に代表格として西国三十三観音菩薩の石像・石仏を安置^{たてまつ}するものである。なお、事前に本場の西国三十三か寺を巡拝し、それぞれの札所からその場所の土（霊土）を採取して来たことから、その土を各石仏直下に埋めて安置した。いわばこの石碑は五霊場（134 個所）巡拝記念塔、ならびにその写し霊場の象徴なのである。

その 2；別記《歴史&宗教 No011》に記載する年表（歴史的経緯）を踏まえると、実は、本石碑は「おゆき」が亡くなって 64 年後に建立されたものです。建立時点で既に亡くなっていた「おゆき（=妙現尼）」を願主とした真の意図は何だったのか？ これにはどんな経緯があったのだろうか？

後世の南竜山（おゆき）信者が、「おゆき」の功績・偉業をあらためて顕彰し、尊敬・畏敬の念を込めて建立したということでしょう。その顕彰に値する原点をおゆきの特に五霊場（134 個所）巡拝に見出し、合わせて奉遷霊場として整備したということでしょう。

その 3； さて、 $\left. \begin{array}{l} \text{願主自ら五霊場を巡拝したのか、} \\ \text{願主の意向を受けた代参だったのか、} \end{array} \right\}$

旅日記でもあれば貴重な文化財になるのではないかと思います。総計 134 個所もの巡拝について様々な点から興味の尽きないものがあります、耕龍寺住職に聞いてみたが、書付などは何も^{N o n}ないとのことです。

5. ここの「西国三十三観音石仏」のこと

対象は前記図5-1④にあり、図5-8のとおりです。「滝山地区 歴史の散歩道案内 解説集」によれば、元々は、今のように1個所に纏められていたものではなく、秋葉山頂までの緩やかな南向き斜面の広い範囲に安置されていたものです。同集には、天保十四（1843）年に建立したと記述されています。

この石仏は現地図5-8のとおり、一番奥を1番（紀州は和歌山県的那智山青岸渡寺、如意輪観世音菩薩）とし順次こちら側に並べ、一番手前は33番（美濃は岐阜県の谷汲山華嚴寺、十一面観世音菩薩）であります。各像の右側には、図5-9abのとおり「西国〇〇番」、左側に「国名と山号」のみとシンプルです。本場の西国三十三観音霊場と本尊の象容も一致します。年号や施主名が台座や裏側にも刻されていませんが、以上のストーリーに鑑みて三十三体の本石仏は、前記図5-4a

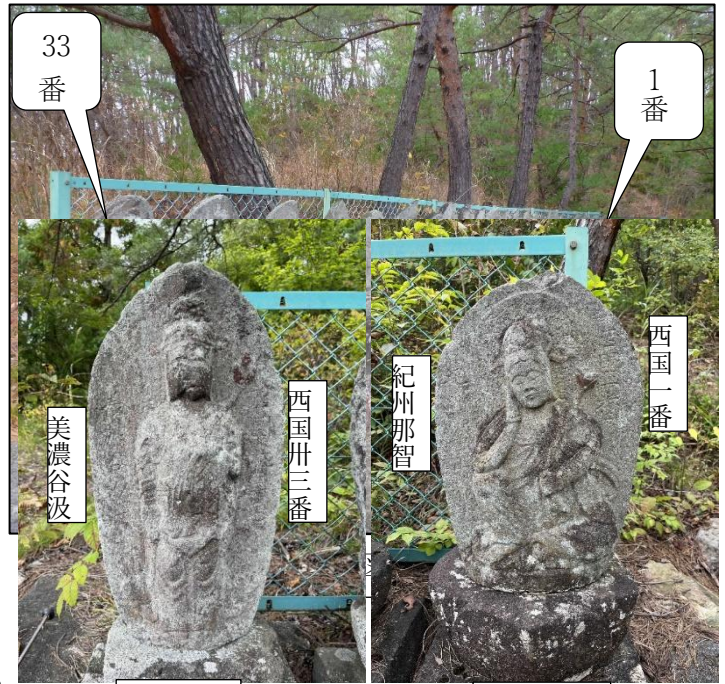


図5-9a

図5-9b

碑文刻字の「西国三十三所」観音霊場－石仏」（写し霊場）であることが判然とした訳です。

当該地のものと現在の正式の本場寺院名の対応一覧については後記する。

6. 先輩諸氏の解説精度

瀧山郷土史研究会事務局投稿記事図5-10の左下右面の一部について、前出野口氏書籍P203と合わせて間違い探しをします。結果は図(表)5-11のとおりであります。

西国三十三観音 耕龍寺 秋葉山

昨年六月二十二日に行
なつた調査の報告。
以前は、秋葉山の斜面に
点在されていたが、現在の
地に整備され、再建立され
ている。

瀧山史談

瀧山郷土史研究会 第十七号

事務局
990-2421 山形市上桜田
滝山コミュニティセンター内
瀧山郷土史研究会
FAX ☎ (023) 622-1340
(023) 635-1096
印刷 中央印刷株式会社

瀧山地区内石仏&石像調査中間報告

表
坂東秩父最上都合百番札所
西国三十三所霊土拜請安置
讚州象頭山諸國佛閣神社

裏
天保十四癸卯年四月供養之日

右面
奉巡拜 天下泰平 國家安穩
為現當 二卅大宇梁 子孫永
盛繁衍 願主当村 以下不明



奉獻碑

事務局長 野口 隆夫

事務局 野口 隆夫

事務局 野口 隆夫

図5-10

史 談	現當 [?] 二 [?] 卅大字楽	子孫永盛繁？祈	願主当村	以下不明
前出野口氏書籍	現當二世大安楽	子孫永成□□□祈	願主当村	善助妻
正解(私の解説)	現當二世大安楽	子孫永盛繁栄祈	願主當村	善助妻 お之 (おゆき)
図(表)5-11				

7. 「現當二世」から学ぶこと

ところで、前記図 5-5 に刻字「為 現當二世大安楽 子孫永盛繁栄祈」中の現當二世が気になりました。

その 1；作家の五木寛之さんは「過去と現在と未来」の時間に、それぞれ「回想、思想、空想」を対応させてうまい言葉を述べています。私が思うに、自己の慰めのためには回想もいいかもしれないが、過ぎ去ったことに一喜一憂したとしても新たな力が湧く訳ではありません。天下泰平の理想郷を目指し利他回向の志あらば、やっぱり、**今のこの時において思想力**ならびに**空想力**を磨く必要があるということでしょうか。今この時に何をしたいのか、何をするのか、何を成し遂げつつあるのか、です。

その刻字にある現當二世は、仏教上は現在世と当来世（死後のあの世）ですが、私見を言えば当来世＝到来世であり、すなわち未来と同義でしょう。その刻字は現在と生きている自分の未来に対する祈りを込めたものです、過去に対する悔悟や同情・回想を乞うものではありません。さすが賢明です。

その 2；酒井雄哉さん――比叡山延暦寺「千日回峰行」を 1980 年と 1987 年の 2 回満行した天台宗北嶺『大行満大阿闍梨』――が話された言葉です。「・・・いろいろなことも経験した。でも、それはすべて過去の話、これからどうやっていくか、前のことは忘れて、年齢とかそんなものは関係ない、これから、明日から何をすべきか、どうしていくか、・・・」難行苦行を潜り抜けて大阿闍梨になった酒井さんは、過去に何々をやった、だから自慢する、偉いと思う、そんなのは傲慢な態度、何の価値もないと、過去の成功体験について非常に自制的に熱く語っています。

その 3；その二人に私の経験を重ねて学ぶことについてです。過去の成功体験の追憶は一時の慰め、一過性の自己満足です！ 仲間内が集まって互いに昔の思い出話と自慢話も時間を繕う、傷を慰め合うのはそれはそれとしていいのかもしれませんが。しかし、生きている生身の人間の価値とは何ぞや！ 極論を言うと過去の栄光そのものは、今、何の価値もありません、くそ（何）の役にも立ちません。

過去を積み上げた今がどうなのか、
体験を踏まえて多くを学んだはずの今何をしているのか、
経験を蓄積した今何をするのか、

今この瞬間に満足を覚えるような今の生き方なくして、過ぎ去った思い出話でごまかそうとしてもただ虚無感が残るのみです、私の実感です。過去は取り返しが出来ません、冷酷だが回想・追憶に執着していると早晩ボケル気がします。過去に四国霊場へんろ 3 回・西国霊場へんろ 1 回をやったからといって、今の私は脊柱管狭窄症でボロボロ寸前！ 今、今日、明日何をするか、どのような行動を取るかです。 自戒・自重・自制！

[参考；西国三十三観音霊場対応一覧]

当該地の奉獻観音石仏刻字				本場、現在の正式寺名と本尊	
1	西国一番	紀州	那智山	青岸渡寺	如意輪観音
2	二番	紀州	三井寺	金剛宝寺	十一面観音
3	三番	紀州	粉川寺	粉河寺	千手観音
4	四番	和泉	槇尾寺	施福寺	〃
5	五番	河内	藤井寺	葛井寺	〃
6	六番	大和	壺坂	南法華寺	〃
7	七番	大和	岡寺	龍蓋寺	如意輪観音
8	八番	大和	長谷寺	長谷寺	十一面観音
9	九番	奈良	南円堂	興福寺	不空絹索観音
10	十番	宇治	三室戸寺	三室戸寺	千手観音
11	十一番	山城	醍醐寺	醍醐寺	准胝観音
12	十二番	近江	岩間寺	正法寺	千手観音
13	十三番	近江	石山寺	石山寺	如意輪観音
14	十四番	近江	三井寺	園城寺	〃
15	十五番	京	今熊野	観音寺	十一面観音
16	十六番	京	清水寺	清水寺	千手観音
17	十七番	京	六波羅寺	六波羅蜜寺	十一面観音
18	十八番	京	六角堂	頂法寺	如意輪観音
19	十九番	京	革堂	行願寺	千手観音
20	二十番	山城	善峰寺	善峯寺	〃
21	二十一番	丹波	〇〇寺	穴太寺	聖観音
22	二十二番	安浄	総持寺	総持寺	千手観音
23	二十三番	安浄	勝尾寺	勝尾寺	〃
24	二十四番	〇〇	中山寺	中山寺	十一面観音
25	二十五番	播磨	清水寺	清水寺	千手観音
26	二十六番	播磨	法〇寺	一乗寺	聖観音
27	二十七番	播磨	〇〇寺	圓教寺	如意輪観音
28	二十八番	丹後	〇〇寺	成相寺	聖観音
29	二十九番	丹後	尼寺	松尾寺	馬頭観音
30	三十番	壬生	〇〇寺	宝厳寺	千手観音
31	三十一番	近江	長谷寺	長命寺	千手・十一面・聖観音
32	三十二番	近江	〇〇寺	観音正寺	千手観音
33	三十三番	美濃	谷延寺	華厳寺	十一面観音

(end)

【 あ と が き 】

その1；①から⑤までの滝山地区内5個所の写し霊場について記述して来ました。一番遠く離れているもの同士の間隔は直線で1.7km位です。この狭い範囲(図M-2)に5個所—同図中黄色の楕円印—もあります。四国八十八か所が2個所、西国三十三か所も2個所あります。この2個所(四国と西国)の本場霊場は歴史的にはとても古く、全国的に現在でも最高クラスの人気を誇る霊場です。この写し霊場は地域に取って誇れるものです。季節の節目で、あるいは観音様の縁日の毎月18日、お大師様の縁日の毎月21日には、人々が参集し、祭祀や供養—お経(経典)や偈文などを称える—を行い、終わるといわずにお茶飲みをして親睦・融和を図って来た歴史が積み重なっています。

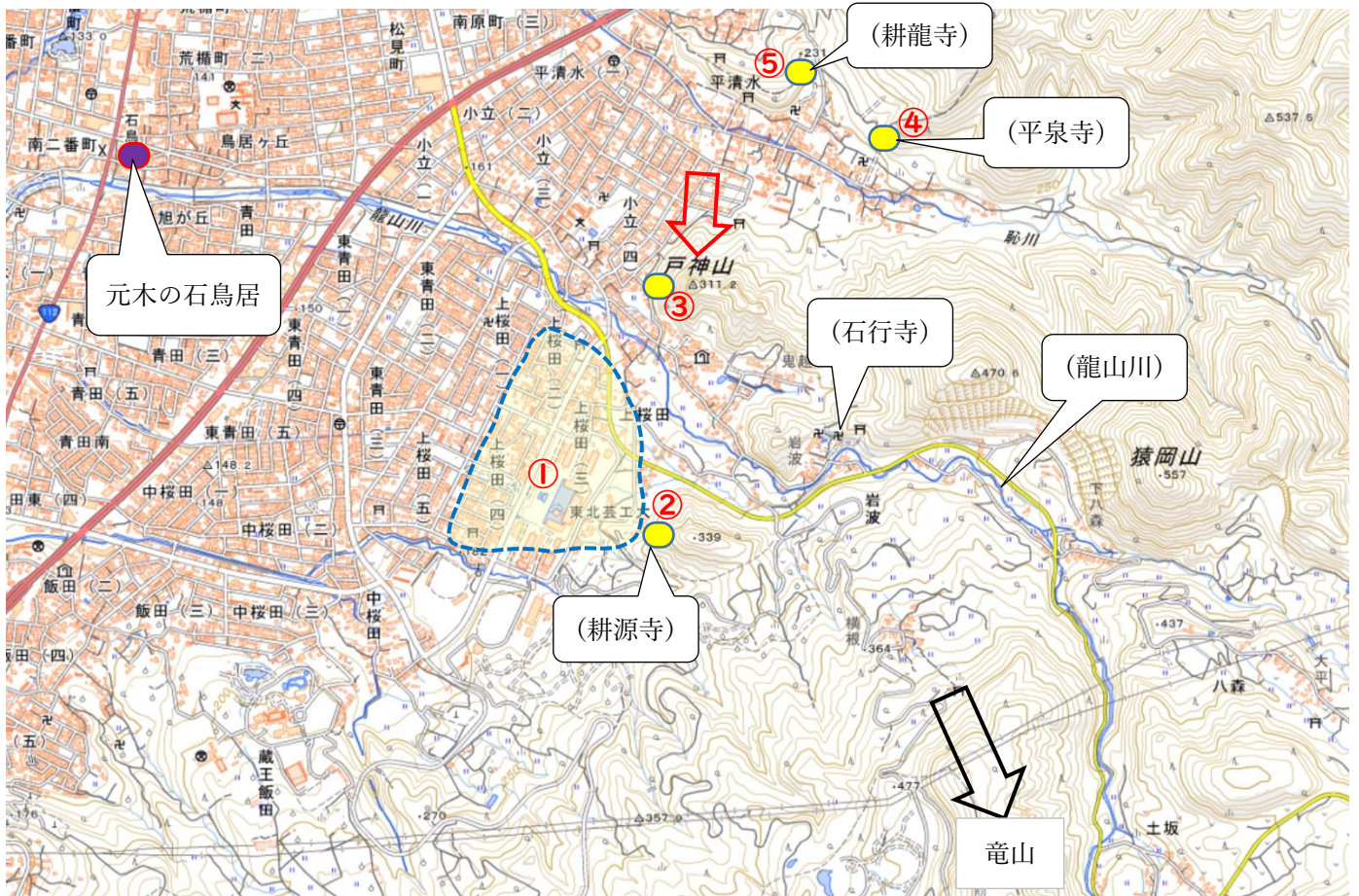


図 M-2

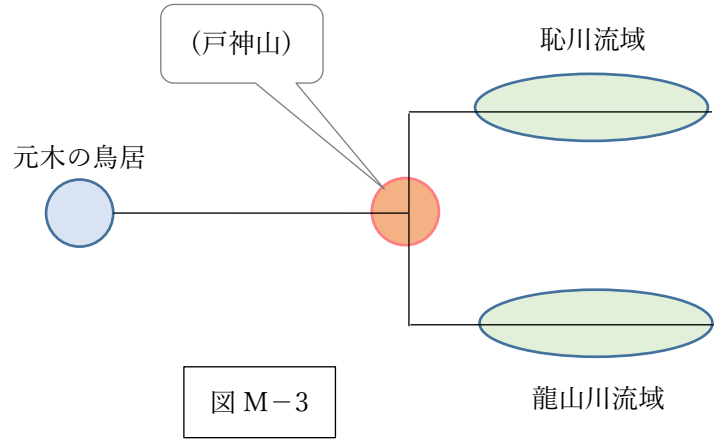
その2； それでは、なぜ、この地域に写し霊場が密集したのか、「戸神山」との関連です。

□1；「戸」とは「と、とびら、人の住む建物の出入口(門)」です。したがって、「戸神」は門番の神、出入口を見張って、悪霊を制する神の在所ということでしょう。

□2；また、「古事記」には「戸神」は「戸外・門戸」の神として、山の神である大山津見神(大山祇神)とおおやまつみのかみと野(里)の神である鹿屋野比売神(草野姫)との子であり、日(太陽)の射さない谷間を司る神とあります。図M-2を見ると、戸神山は東側の山領域と西側の野(里)領域の境にあります。

その3； 加えて、竜山信仰との係りの視点です。図M-2にある元木の石鳥居が大きなエリアの結界だったでしょう。竜山に向かって歩を進めると戸神山の麓から急に平野部が狭まります。また、北側恥川流域も戸神山の麓から急に狭まります。このエリアは、行基開創・慈覚大師中興の時代にあっては瀧山寺三百坊の拠点であったことなど、戸神山を中央出入口部に配置した一大聖地—デフォルメすると対称

性の図 M-3 でありました。その中の戸神山の戸神は、第二の門番結界の役割を果たして来た、竜山・三百坊の御宝善神だったのです。



[最後 に]

当滝山地区には、石碑・石塔類で知れ渡っているもの、いわゆる日（陽）に当たるものもあれば、目立たずひっそりと佇む、いわゆる日蔭のもの（悲観することはない、夜はお月様が照らしてくれる。）もあります。それらを祀って来た人々の高齢化に伴い、あるいは時代の価値観変遷の中で、そのような慣習が次第に薄れ、行事も途絶えています。また、石仏の手入れなども行き届かなくなって来ているようです。しかし、万物、神羅万象は「陽中に陰あり、陰中に陽あり」で、やがては関心を寄せる人も表れて、再興の機会も訪れるでしょう！ところで、本件「滝山地区の写し霊場」で取り上げた霊場と「おゆきこと妙現尼」と平清水にある二つの寺院（平泉寺および耕龍寺）の全体関係性（図 M-4）が浮かびました。共通点もあり、違う処（面）はおゆきが接着剤となって統合性を導き出しているような構図です。私の眼からは、何かと異体の複層性、重層性、多様性のある社会と重なって来ます。異なる個体の集合体における協働作業——「異体 crossing」＝人間関係に当て嵌めると「対等互啓（恵）」です。——にこそ真の安らぐコミュニティが育まれるものと思っています。

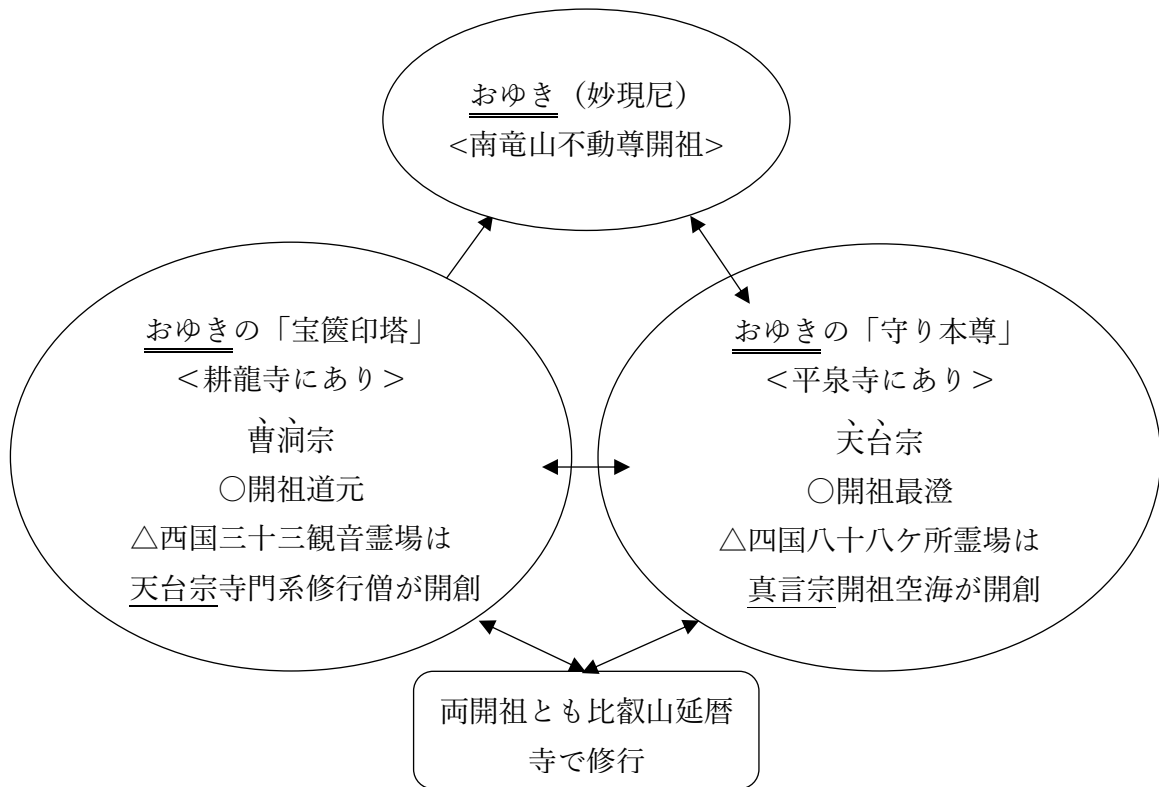


図 M-4

(完)

2016 (平成 28) 年 12 月 31 日 (土)

山形市上桜田
大 沼 かおる 香